

二次元

平成26年4月1日発行第11巻第2号通巻88号

# ドリームマガジン

2D DREAM MAGAZINE

cover illustration by カガミ

大人気美少女ゲームが連載コミックで登場!

## 『監獄戦艦3』

楠木りん 原作: Anime LiLiTH

えっちマンガ  
& 4コママンガ

MISS BLACK

おおたけし

ばふえ

天海雪乃

松波留美

MAKI

嘉納あいり

KTC特製スポーツタオル  
今年も発売! 誌上通販先行

連載&読み切り小説

新連載『聖騎士牧場』

上田なかの×A.S.ヘルメス

高岡智空×からすま式

089タロー×牡丹

天戸祐輝×アルデヒド

筑摩十幸×こうさく

蒼井村正×カガミ

カラーピンナップ

うるし原智志

あいざわひろし

大林森

カガミ

今号の特集

落書きヒロイン

DIGITAL  
EDITION  
デジタル版

vol.75

2014

04

表紙&ピンナップテレホンカード  
応募者全員サービス

立ち読み版

成年向け雑誌





# 監獄戦艦3

熱砂の洗脳航路 PRISON BATTLE SHIP 3  
BRAINWASHING ROUTE OF BOILING SAND

母娘メス豚歓迎パーティ

小説 <sup>あおい せらまさ</sup> 蒼井村正 挿絵 カガミ  
NOVEL ILLUSTRATION  
原作 AnimeLiLiTH  
ORIGINAL



監獄戦艦3×落書きヒロイン!  
母娘の身体に施される  
欲情まみれのボディペイント!



ガチャンッ!

艦内照明が日中を示す青から、夜間モードの赤に切り替わった。それを合図として、高慢が淫蕩に、威圧が媚態に変化する辱悦の時間がやってくる。

「ふん……私達にこのような恰好をさせて興奮するとは、男どもはつくづく度し難い生き物だな。まあいい。どのような趣向であれ、我らクシヤナ軍女将校は最高のメス豚娼婦だということを思い知らせてやろう」

「ええ、身体に描かれたこの文字や装飾に、どういう意味があるのか判りませんが……任務とあらば致し方ありませんね」

ハート型のボディペイントに飾られた乳房を露出し、下着もあらわにした扇情的な軍服を見せつけながら囁き交わしているのは、「女帝」と呼ばれて畏怖されているベアトリス・クシヤナと、その娘で「死神」の異名を持つ女中尉、キラ・クシヤナであった。

破竹の勢いで火星の八割近くを支配下に置いたクシヤナ軍の総督母娘は、中立国の戦艦に座乗して首脳会談へと向かう途上、密かに洗脳と肉体改造を施され、偽りの記憶を植え付けられて男どもに肉悦奉仕を始めようとしているのだ。

成熟した女性ならではの色香を放つ、母、ベアトリスの色白で豊満な裸身、若々しい躍動感に溢れ、牝豹のように精悍な娘、キラの褐色ボディ。いずれも爆乳、美尻の甲乙付けがたい女体が、卑猥な言葉が描き込まれた裸身を寄せ合うようにして床に横たわり、挑発的な視線を全裸の男どもに送っている。

破廉恥極まりないでたちであるが、価値観を容されたベアトリス達母娘にとって、この姿は男達の興奮を盛り上げる演出として彼女ら自身も楽しんでるようだ。

「今夜は二人揃って、この艦の全将兵達に奉仕して頂くことになりますが、よろしいですか?」

この場を仕切っている士官が、二人の肢体を舐め回すように見ながら問いかける。

「望むところだ! さあ、涉外任務を始めようではないか!」

「ええ、見ているだけでは時間の無駄ですよ。それに、フフッ、どのチンポも元氣いっぱいにそり勃っているじゃありませんか」

自信たっぷり宣言するベアトリスと、それに追従して淫蕩な微笑みを浮かべた娘、キラ。

二人の頬は上気し、瞳も熱く潤み、ボディペイントに縁取られた乳輪と乳首も勃起を際立たせて、既にかかなり発情した状態にあることを物語っている。

下着越しに浮き出た秘裂も、熱い潤みを溢れさせ、股間に恥ずかしい濡れ染みを形成してしまっているのだが、欲情した母娘は、恥じらうどころか、淫臭をムンムンと香り立たせる秘部を見せつけるかのように太股を割り抜けていた。

そんな二人のあられもない姿を、数台のビデオカメラが様々なアングルから撮影している。

「今日も、教材のために涉外行為の一部始終を記録させて頂きますよ」

「うむ、研究熱心なのはいいことだ、我ら母娘の極上メス豚奉仕、存分に撮影するがいい」

ベアトリスはカメラ視線でセクシーポーズを取って見せながら、鷹揚に頷く。

「では、クシヤナ軍総督母娘のセックス奉仕、たっぷり堪能させて頂きます!」

「ああ、さつさと来るがいい! 私とキラの肉体で、お前達に最高の快楽を与えてやろう!」

更に開脚を強め、たわわなバストを揺れ弾ませて、淫蕩な女帝は男どもを挑発する。

「おう! 言われなくたって姦ってやるぜ!」

「穴という穴を、チンポ汁で満たしてやるッ!」  
鼻息も荒く襲いかかって来た男達の群れに、火星

最強の女傑達が呑み込まれた。

数時間後……

「ひあうっ! んっ、んひいつ! おふうっ! はおうう、ああ、あああああッ!」

「んぎいっ! ひうつ、んあ、そつ、そんなに奥ばかり突かれたら、あつあつあつ、うああッ!」  
むせ返るような淫臭立ちこめる室内に、はしたなく裏返った女達の嬌声が響く。

形ばかりの軍服を剥ぎ取られ、下着の残骸だけをかろうじてまとわりつかせたベアトリスとキラは、精液と汗に濡れ光る裸身をくねらせ、男どもとの乱交に耽っていた。

普段は冷徹に澄ましている美貌はだらしなく蕩け、体液に濡れまみれた裸身は、荒々しい愛撫に反応してウネウネと淫らに振れ、悶え抜く。

「あぎ、あひッ! しぎゅうっ! 子宮壊れりゅううう! そんならしたら、あだじのしぎゅうう、こわれひやうううッ!」

「なっ、情けない声を出すな、キラ! クシヤナ軍の女たるもの、こつ、この程度で乱れては……あひいんッ!」

子宮口をハードピストンで連打されてよがり乱れる娘を叱咤していたベアトリスも、激しいアナル注挿を受けて仰け反ってしまう。

(こつ、この程度の快感で乱れてはおれぬ! クシヤナ軍の提督として、無様な姿を見せる訳にはいかないのだ。この艦内にいる男どものチンポ、一本残らず涸れ果てるまで射精させてやるぞ!)

そそり勃った男根の群れを熱く潤んだ瞳で見回しながら、ベアトリスは歪んだ義務意識を燃やす。

「クシヤナ軍の女将校は、最上級の娼婦として男達に快楽奉仕することを誇りとしている」という偽りの記憶を洗脳装置によって植え付けられた女帝は、非常識な淫蕩行為を違和感を感じることもなく受け







あ、尻は……アナルはもういいいいッ！」

女帝と呼ばれて恐れられた女は、腸壁を削り取らばかなりのハードピストンに裸身を跳ね上がりせたわな乳房を揺れ弾ませてよがり乱れてしまう。

パンパンという肉打ちの音を立てて、男の下腹がぶち当たった豊臀の柔肉が波打ち、汗とザーメン、愛液の入り混じった淫汁を飛び散らせた。

「あひつ、ひぎつ、んぐううう、ほうっ！ おうっんほつ、あふうんっ！ くあ、はっ、んひっ！」

絶え間なく声を上げながら、ペアトリスの成熟ボディが肛悦に震え、奔放に跳ね悶える。

普段は余裕に満ちた冷笑を浮かべている唇はだらしなく開いて涎まみれの舌が突き出し、ひと睨みで男どもを威圧していた目は熱く潤んで視線の焦点が定まっていない。

「ケツマンコが気持ちいいんだらう？ さっきから何回もケツアクメ決めてるじゃねえか。そおら、またイッチまいなあ！」

アヌスの奥深くまで勃起を突き挿れた男は、飢えた子宮を腸壁越しにこね回し、暴力的な突き上げで腹膜全体を揺すり立てた。熱く若々しい剛直が最深部を極めるたびに、張り詰めた亀頭が腸奥を殴りつけ、甘美な衝撃が女帝の成熟ボディを貫いてゆく。

「うはんっ！ おうっ、ひふううんっ！ ケツマンコは……もう、もう……いひからあああ！ ほあう、ひぎつ、そんなに激しくすりゆなああッ！」

極太男根がアナルを注挿すると、鮮やかな紅色に充血した肛門括約筋の菊皺がまくれ返り、第二の性器として開発された直腸が、男のチンポを包み込んでモグモグと咀嚼するような妖しい蠕動を起こす。

「なんて淫らに動くケツマンコなんだ!? 俺のチンポが喰われちまいそうだぜ！」

「くふう、喰っひえやるじよお！ んほおおお！ あぐううう、あひ、ほあうううううッ！」

男の軽口に言い返そうとするペアトリスであったが、内臓全体を震わせる腹膜性感に酔わされて呂律も回らなくなっている。

「おらおらおらあ！ もつとはしたなくよがり狂ってイッチまいな！ お前に殺された戦友の分まで恨みのザーメンぶちまけてやるぜ！」

火星の覇者にあるまじき嬌声を上げて悶え狂う美熟女の尻穴を、積年の恨みと欲望に猛った男根が蹂躪する。掻き回され突き擦られる直腸壁の愉悦はヴァギナにも伝わり、熟女の膣奥で、狂おしい飢えにも似た挿入欲求がどんどん強まってゆく。

（欲しいッ！ オマンコにも、硬くて熱いチンポが……ザーメンが欲しいいいいいッ！）

熱れきった女体が、ブライドと狂おしい欲情のせめぎ合いに震えるが、心の奥底にわずかに残された女帝としての矜持が、挿入をおねだりすることを頑として拒絶していた。

「ヒビヒッ、オマンコがグネグネ動いているのが、ケツ穴の肉壁越しに伝わって来るぜ。そんなにチンポが欲しいのなら、もつと卑屈になつておねだりして見せろよ、淫乱メス豚女帝様」

アナルを犯している若い下級兵士は、勝ち誇った口調で屈服を促す。

「ふっ、ふじやけるなああ！ わつ、わらしはクシヤナ軍の総督らろお！ だつ、誰が貴様等のような兵卒にやんかにおねだりなどするものかッ！ ぶつ、分をわきまえりよおッ！」

侮辱されたペアトリスは怒声を張り上げるが、裏返り蕩けた声音には、一喝で人々を震え上がらせた女帝の威厳や迫力は欠片も残っていない。

「そりゃあ大変な失礼をいたしました。俺ごとき雑兵が女帝様の神聖なオマンコにチンポ挿れられる訳がないですよねえ。だから臭いケツマンコでガマンさせていただきますよッ！」

ずぎゅんっ！ ぐちゅるんっ！ どぶどぶどぶどぶうううッ！

ひときわ強く突き上げられた勃起が内臓全体に甘美な衝撃を叩き込み、射精を開始する。

「ほぎいいいいいいッ！ あはあ、あ、おあああああんんんんッ！」

擦りまぐられて充血した腸壁に染み通る精液の熱さに奇声を上げたペアトリスは、幾度目とも判らぬアナルアクメに襲われ、成熟ボディを波打たせる。「なんだかんだ言いながら、きっちりアクメするじゃねえか、このエロ尻淫乱オバサンはよお！」

白目を剥いて仰け反る女体の奥で射精を続けながら、下級兵士はサインペンを手にする。

「ケツマンコだけでイキまくりやがって、これが宇宙に悪名を轟かせた女帝様か、ザマあねえぜ……」

ペアトリスの太股にも、新たな絶頂マークが印された。

「キラちゃんのお母さんはホントに強情だねえ、素直におねだりすれば、キラちゃんみたいにオマンコにぶつといチンポぶち込んで、思いつきグチュグチュしてもらえるのになえ」

キラの膣内に大量射精した後もペニスを抜かず、しつこく注挿を続けていた中年男が、アナルアクメに震える女帝の痴態を横目で見ながら声をかける。

「おつ、お母様の悪口はゆつ、許しましえん……こつ、殺しましゅよッ！」

母、ペアトリスを誰よりも敬愛し心酔しきつていけるキラは、絶頂の余韻に褐色ボディをわななかせながら声を荒らげる。

母娘揃って陵辱され、互いが絶頂する痴態を見せ合っても、ペアトリスに対するキラの信頼は揺らいでいないようであった。

「おおお、怖いなあ、そんなに怖いこと言う悪い子には、Gスポーツ責めのお仕置きだ！」



大げさに身震いして見せた中年男は、小刻みなピストンで膣壁の急所を擦り責めた。

ゾリッ、ギユリッ、ギチュッ！ クチュクチュクチュクチュッ！

膣天井に細やかな柔突起を密生させた快感スポットを、大きく張り出した亀頭冠が激しく摩擦する。

「おひいひいひいッ！ イッ、はぎゅううう！ そつ、そこはあ、そこはラメれすうう！ やつ、ああああ、あきゅうううううううんッ！」

急激に込み上げて来るむず痒い尿意に襲われたキラは、落書きだらけのしなやかな裸身を悶えくねらせてよがり狂ってしまう。

（ああああ！ 来る来る来るううッ！ オシッコ……潮噴き……お漏らしアクメが来るうううッ！）

あまりにも強烈すぎて恐怖感さえ沸き起こってくるような尿道快感に、キラの美貌が歪む。

ヴァギナやアヌスだけでなく、尿道までも性感帯として改造された女体がギクギクッ、と強張り、戦闘のために鍛え上げられた筋肉が褐色ボディに艶めかしい凹凸を浮き出させて淫らにうねる。

「いよいよ、その生々しい反応、実にいいねえ。キラちゃんのエロエロ褐色筋肉、最高だよ！」

切迫感に襲われ悶える女戦士の身体を弄り回し、腹筋の凹凸や背筋のうねりを堪能した中年男は、巧みな腰使いでGスポットにとどめの刺激を送り込む。

「ふぎいひいひいッ！ イグッ、出るッ！ うわあああ、イグイグイグ出りゅううう！ んひいひいひいッ！」

ぷしゅうッ！ ぷしつ、ぷしやつ、ぷしやああつ、ぷしやぷしやぷしやぷしゅううううッ！

尿口から噴水のように潮噴きを起こし、死神と恐れられた女戦士は白目を剥いて射出絶頂を極める。

「おほおつ、いっぱい出た出た。それじゃあ、オジサンもキラちゃんの中に出してあげようねえ」

歡喜の笑みを浮かべた中年男は、潮噴きの脈動を伝えてくるGスポットに亀頭をきつく押し当てたまま、欲望の煮詰め汁を解き放つ。

ぐりゅううッ！ どびゅつ、どびゅくつ、どびゅるるつ、どびゅくどびゅくどびゅううッ！

「ほひいひいひいひいッ！ 素敵、熱いッ、熱いチンポおもしろッ！」

ぷしぷしぷしやあああああッ！！

乙女の急所に灼熱ザーメンの直撃を受けたキラは、更に大量の潮を噴き出しながら、限界を超えた絶頂へと飛翔した。常人ならショック死してしまうほどの快感を送り込まれた褐色美女の裸身は、全身の関節が外れてしまったかのようにガクガクと震え、連続でアクメの波に包まれる。

「死神のイキッ振りは派手だなあ……おい、いつまで寝てるんだ、娘の潮噴きアクメを褒めてやれよ」

アナルアクメの余韻でグツタリと弛緩していたベアトリスは、髪を掴んで荒つぽく引き起こされる。

「つあ！ くらううッ！ きつ……キラあ……なんなに……潮噴きして……くはあ……ッ」

喜悅水を噴き上げてイキ狂う娘の痴態を目にしたベアトリスは、羨ましがねた表情を浮かべて呻く。

「キラちゃんは派手にイキましたねえ。ベアトリス様もチンポでゴリゴリッ」とGスポット擦られて、思いつき潮噴きしたいんじやありませんか？ 潮噴きアクメ、超気持ちいいんでしょう？」

先ほどまでの荒つぽい口調とは打って変わってへりくだった物言いになった男は、ベアトリスの子宮を直腸壁越しにこね回して焦らしながら、再度の降伏勧告を突きつける。

ぐじゅつ、ぐじゅつ、ぐちゅぐちゅぐちゅ、ぐじゅつ、ぐじゅつ、ぐちゅぐちゅぐちゅ……

体液のこね回される淫音を立てて、女帝のアヌスが執拗に責め立てられ、ヴァギナの飢えを臨界点ま

で引き上げてゆく。

（欲しいッ！ オマンコに……チンポが欲しいッ、奥の奥まで突っ込んで、子宮を突き上げて……射精して……潮噴き……したいッ！）

飢えた子宮で燃え盛る欲情の炎が、わずかに残った矜持を焼き尽くし、女帝を発情した牝に変える。

「んぐうう……くらううッ！ ……くつ、くだしい……チンポ……チンポくだししい……」

ガマンの限界に達した女帝の口から、消え入るようなおねだりのセリフが紡ぎ出された。

「え？ なんですって？ ケツマンコが出すはしたない音に紛れて、お声が良く聞こえませんでしたよ。何かおっしゃいましたかな？」

意地悪な男は、すつとぼけた表情で聞き返す。

「チンポ……わたしのドロドロに濡れた淫乱オマンコにチンポを挿れてくだしいッ！ いっぱい掻き回して、何度も射精して、メチャクチャに犯してくだしいッ！」

クシヤナ軍の将兵達を鼓舞し、敵兵達を畏怖させてきた女帝のおねだりヴォイスが、艶めかしい反響音を伴って室内の空気を震わせた。

「ようやく素直になったな、手間かけさせやがって、このメス豚娼婦！」

パアンッ！ と鋭い打音を立てて、豊臀が平手打ちされた。

「つひやあああああッ！」

落書きだらけの尻肌には赤い掌型の打痕を刻まれたベアトリスの音が甘く裏返る。

打ち据えられた尻肉と、痛覚が伝わった骨盤、更には脊椎や肉感的な太股を支える大腿骨までもが、

絶大な快感に打ち震えていた。

「エロい声上げやがって、スパンキングがお気に入りか？ ならもつと叩いてやるよッ！」

パアンッ！ パアンッ！ パシィィンッ！



人類を超越した力で王国を守護する少女騎士団  
その清らかなる肢体に  
繁殖牧場化の姦謀が迫る!!

# 聖騎士牧場

家畜に堕ちた戦姫たち

第一話 亜人騎士団

小説 NOVEL うえだ 上田ながの  
挿絵 ILLUSTRATION A.S. ヘルメス

著者近刊

「勘違いしないでよね! アンタの事なんか大好きなんだから!!」呪いで本音しか言えなくなったツンデレお嬢様!



好評発売中!



「よいか皆のもの！ここより先に絶対に敵を進ませるな！必ず殲滅！いいか、必ず殲滅だ！」

聖ガブランド王国王都ガブラスタより南方三十キロに存在するミールの丘に、ガブランドの若き王子カールラントとロブイナスラーガブランドの強い決意を秘めた声が響き渡る。

「ここ、ミールを抜かれれば後はない。敵は我らに都に、我らの家族が暮らすガブラスタになれ込むことになる。それは……それだけは絶対に許してはならない。我らが愛する家族を蹂躪されるわけにはいかぬ！いかぬのだ！」

白馬に跨がったカールラントは王族に代々引き継がれてきた聖剣を強く握り締めながら、自分の目の前に並ぶ騎士達を、兵達をぐるりと見回した。

誰もがじつとカールラントを見つめている。瞬き一つせず、カールラントの言葉を聞いていた。

皆の顔は強張っている。悲壮ささえ感じる程だ。中には震えているものもある。明らかに恐怖を覚えているものさえた。

だが、それでもカールラントから視線を外すものはいない。カールラントの言葉を一言一句聞き逃すまいとするように……。

皆の視線を受けながら、カールラントは大きく息を吸い――

「勝つ！我々は必ず勝つ！愛するものの為に我々は憎き敵――邪悪な魔物共を滅ぼすのだっ！」

聖剣を天に向かって振り上げた。

「おおおおおおおおおおおおおおおっ!!」

カールラントの声に兵達が応える。

聖ガブランド王国が誇る三千の騎士達の咆哮が、ビリビリと大気さえも震わせた。

その氣勢を全身に感じながら、カールラントは兵達に背を向け――対陣する敵へと視線を向けた。

(醜き者共め)

カールラントの視界に数十――いや、数百の敵が映り込む。

明らかに人ではない存在――五十年前、突如異界より出現し、平和に暮らしていたガブランドの人々を蹂躪してきた醜き魔族、魔物共が……。

対陣しているだけで敵が発する瘴気にビリビリと肌が痺れる。見つめているだけで息がつまり、全身から血の気が引いていく。

身体中から冷や汗が溢れ出す。魔物がそこに存在しているというだけで、震えさえおきそうになる。

だが――  
(あのようなものの共をガブラスタに近づけるわけにはいかない。我が王国の民に手出しなど絶対にさせない。私は……守る。守ってみせる)

王族としての矜持で恐怖を抑え込むと共に――  
「皆の命、私に預けてくれ!!」

魔下の騎士達に告げた。  
「うおおおおおおおっ!!」

再び兵達が叫ぶ。

「――殲滅せよ!!」

彼らの声を聞きながら、カールラントは振り上げた剣を敵に向かって振り下ろした。

「おおあああああああああつ!!」

これに込め――兵達が一斉に動く。

己の武器を握り締め、国を、家族を守る為に魔族に向かって突撃を開始した。

――数時間後。  
「いやだつ！助けてくれ！頼む……死にたくない。助け――ぎやあああああああつ!!」

「母さん……かあさ――うぐえあああつ!!」

「あああ……内臓……オレの内臓があああ……」

ミールの丘は地獄と化していた。  
多くの兵士達の呻き声が響き渡る。溢れ出した血

で、緑の丘が赤黒く染まっていた。  
(何故だ……何故勝てない……)

敵の数は数百――それに対してこちらは三千の精鋭だ。戦力差は三倍以上あるはずなのに……。

数百の魔物達に三千のガブランド騎士団は押されていた。

「くそつ！まだだ！まだだああつ!!」  
それでもまだ、まだ諦めるわけにはいかない。カールラント自身返り血に塗れながらも聖剣を振るうだが――

「しまつ!!」  
一瞬の隙を突くようにオークの爪がカールラントの白馬を斬り裂いた。

「ぐあああああつ!!」  
カールラントは投げ出され、何度も地面に身体を打ち付ける。全身に鈍い痛みが走った。

「だが……私は……ここで倒れるわけにはいかないのだああつ!!」

それでもカールラントは体勢を整え、改めて剣を構えるのだが――

「ぐげつ！ぐげげげつ!!」  
「フシユルルルルル」

既に周囲はオークやゴブリンなどの魔物達に取り囲まれてしまっていた。

「殿下つ！殿下あああああつ!!」

「おのれつ！ここをどけ！どけええええつ!!」  
騎士達が必死に自分を助けようと声を上げ、剣を振る。だが、彼らも敵に囲まれており、身動きがとれない状態にあった。

(最早ここまでか――)

まさに絶望的な状況だった。

(すまないみんな……すまない……)

どうすることもできない。カールラントにできることは、観念し、瞳を閉じることだけだった。

「フェリア——すまない」

その時、カールラントの脳裏に浮かんだのは一人の女騎士の姿だった。

背中まで届く銀色の長髪に、スラリとした彫像のように均整のとれた身体を騎士服に包んだ女騎士の姿を……。

（もう……キミに会えそうにない……。ごめん）  
女騎士の切れ長の美しい瞳を思い出しながら、ギリッとカールラントは唇を噛み締める。

「はあああああああああつ!!」

裂帛の気合いが戦場に響き渡ったのはその刹那のことだった。

「ぐぎやああああつ!!」

次の瞬間、ザシュツという斬撃音の後に魔物が断末魔の悲鳴を上げる。

「——え？」

まるで予想もしていなかった事態に瞳を開くと、カールラントの目の前にドズンツとオーガの巨体が倒れた。

そして、一人の女騎士がオーガの代わりに軽やかにカールラントの前に立つ。

銀色の髪。戦場で身に着けるものとは思えない程軽装の騎士服。手には美しい白銀の剣。そして憂いの色を含んだ切れ長の瞳の女騎士が……。

「まさか……どうして……キミがここに？」

呆然と問う。

「……もちろん、貴方の為——ガブランドの為です殿下」

問いかけに対し女騎士——フェリア・アルガスタは口元に笑みを浮かべた。

それとほぼ同時に——

「ガアアアアアアアアアアッ!!」

数匹のゴブリンがフェリアに向かって飛びかかる。

「フェリアっ!!」

反射的に声を上げたカールラントに対し、フェリアは「大丈夫です」静かにそう告げてきた。

同時に女騎士は剣を握る手に力を込める。瞬間、騎士服を着けた細身の身体が一瞬輝きを放った。それと共にフェリアの頭から獣——狼を思わせる耳が伸びる。尻からも長い尻尾が。

「はあああああああつ!!」

そしてフェリアは氣勢を上げると——

「ぐぎやあああああつ!!」

自身に向かって正面から振り下ろされた魔物の攻撃を紙一重で避けると共に、日の光を反射して輝く剣でドジュツと魔物の心臓を容赦なく刺し貫いた。

悲鳴を上げて魔物は大地に倒れ伏す。

「ゴアアアアッ」

「……遅いっ」

仲間がやられても怯むことなく新たなゴブリンの攻撃が背後からフェリアへと向けられる。が、女騎士は振り返ることなく身をよじって回避すると、そのまま返す刃でゴブリンの首を斬った。

「……ゴアアアア」

断末魔の呻きと共にゆっくりとゴブリンは大地に崩れ落ちていく。

そんな敵には見向きもせず、次の敵の懐に潜り込み——

「ヒュッ」

小さく息を吐くと共にこれを斬った。傍から見ているカールラントでさえも、一瞬どこにフェリアがいるのか分からなくなる程に素早い動きだ。当然敵は反応する間もなく斬り裂かれ、打ち倒される。

「凄い……」

あつという間にカールラントを囲んでいた魔物共を殲滅する。その強さに思わず呟く。

「遅れて申し訳ありません殿下」

呆然とするこちらの身体を女騎士が支えてくれた。

「わ……私のことはいい。皆を……皆をつ」

「大丈夫です」

危機に陥っているのは自分だけではない。兵達も、騎士達も救わなければ……。

そのことを訴えたと、フェリアは静かに微笑みを向けてきた。

「ここに来たのは私だけではありませんから」

その言葉を証明するように——

「おらおらおらああああつ!! 薄汚ねえ魔物がオレの——アルト様の前に立つんじゃねえよ!」

戦場に風のような剣風が舞った。

巨大な鉄塊のような大剣を一人の女戦士が振り回している。胸当てから零れ落ちそうな程に大きな乳房を揺らしながら、橙色のウェーブがかかった髪を振り乱しつつ、刃を振るっていた。

巨大な剣が振り回されるたび、魔物達は文字通り肉塊となつて吹き飛んでいく。

凄まじい強さの女騎士——彼女の頭にもフェリアと同じく獣を思わせる耳が生えていた。ウサギを思わせる長い耳が。

そんなウサ耳女戦士に続くように、続々と新たな女騎士達が戦場を駆け抜けていく。

「私だつて……私だつてアルガスタ騎士団の一員なんです! 戦いは嫌だけど……他の人が傷つくのはもつと嫌! だから……だから……ここで貴方達をやつつけます! 絶対ですつ!!」

小柄で、ショートカットの少女が剣を握って戦場を走る。彼女の頭にも犬を思わせる耳が生えていた。

腰から伸びるやはり犬のような尻尾を膨らませながら、魔物に向かって突っ込んでいく。年齢は十代半ばくらいにしか見えない。巨大なオークと比べると

体格差は明らかだった。











**Anime LiLiTHの超人気作『監獄戦艦シリーズ』!  
最新作堂々連載スタート!**

諸君!  
この度の偉大なる  
任務について  
説明する

ネオ・テラーズとクシヤナ軍の  
和平交渉の仲介役として  
永世中立国の我々リブラが  
協力する事となった

よって  
クシヤナ軍の代表を  
リブラへ護送する  
わけだが……

その代表とは  
知ってのとおり

元ネオ・テラーズの  
火星方面軍司令長官  
ベアトリクス・クシヤナだ

そしてその娘  
キラ・クシヤナ

待ってました!

数年掛けて平和ボケの  
リブラ軍首脳部を  
買収しておいた  
投資が生きてくる!

火星で  
我々の仲間を  
何万も殺した  
あの黄女どもを!!

全力で歓迎  
しようでないか!

我ら艦長!

メス豚どもに  
復讐を!



だが諸君  
くれぐれも  
油断はするな

離反したクシヤナは  
いまや火星の  
8割を支配し  
女帝とまで  
言われているヤツだ

ベアトリス・クシヤナと  
キラ・クシヤナを  
洗脳装置メモリー  
プラントにかける!!

ボーガンの  
野望再び!

メス豚どもに  
復讐を!

# 監獄戦艦3

熱砂の洗脳航路 PRISON BATTLE SHIP 3  
BRAINWASHING ROUTE OF BOILING SAND

episode  
01 洗脳開始

漫画  
COMIC

楠木りん

原作 / Anime LiLiTH

発売中のアンソロジー『メガミクライシス16』には  
前作『監獄戦艦2』の読切作も掲載! こちらも要チェック!

イエッサー!!

ボーガン!

— 半年前

ボーガン!

クシヤナ軍が  
大艦隊をもって  
火星に進軍を  
開始した

打破しようと  
するも敗北...

俺を取り囲んでいた  
参謀たちは全員死に  
残った俺は  
船員のミユラー少佐の  
ふりをして  
やり過ごそうとした





おらあ!  
起きろッ!!

なっさけねえ  
野郎ですぜ  
小便もらして  
気絶しちゃった!!

うぐう  
う……

あははは!

ちょっと玉を  
殴られただけで  
みっともなく  
転げ回っちゃって!



何を疑ってる!?

残念ながら閣下は  
戦死なされました……

こっちは  
顔まで  
焼いたんだ



バレてる  
はずなど……

実はな

お前を手当てする  
ついでに  
血液サンプルを  
採取した

!?

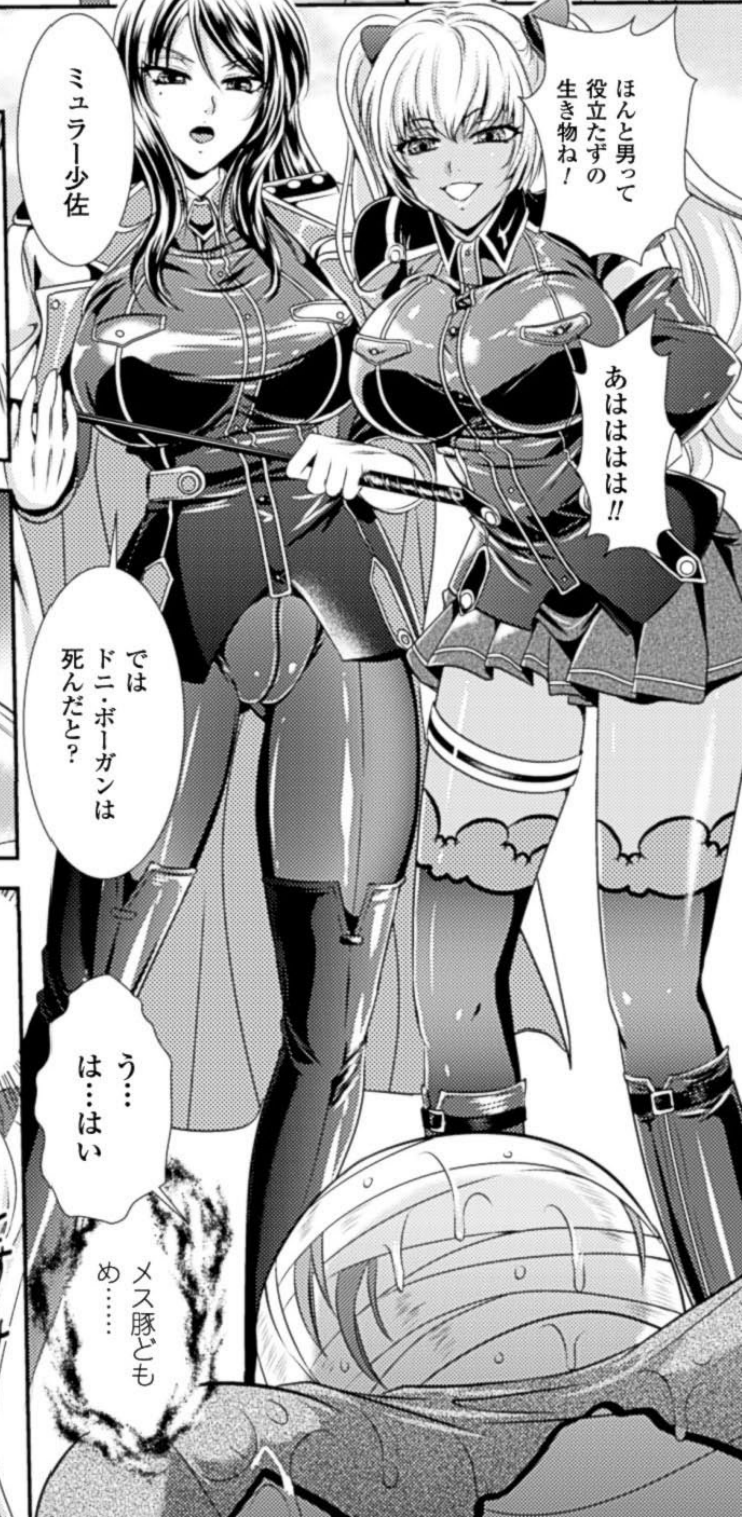


な……  
なんだと!?

それが我々の  
探している  
血液サンプルと  
一致した

この意味  
わかるか?

初めから  
知ってて……!!



ほんと男って  
役立たずの  
生き物ね!

あはははは!!

では  
ドニ・ボーガンは  
死んだと?

う……  
は……はい

メス豚ども  
め……





あれは潜水艦部隊  
到着の合図!!



く……糞が!!

俺を笑い者に  
しやがって……!!

お母さま!

慌てるな!  
警告は上からだ!



はははは!  
やはり俺は  
運がいい!

あとは仲間と  
合流するのみ!



待て!!

やってくれたな  
ボーガン!!

ちっ!





迷いはない…ッ!!

やあ

今の俺に

この…!

腕を犠牲に  
足を守ったか

逃がすな!

俺は  
生き延びるぞ!!

生き延びて  
チャンスを  
待つ…!!



そして今?

卿がリブラの  
アタモ大佐か?

しばしの航海  
よろしく頼む

提督  
乗艦を心より  
歓迎いたします

どうぞ我が船へ

リブラ軍の  
アタモ大佐となった  
俺の前に  
こいつらがいる!



その前に…

貴艦トリスタンの乗員全員が本人であるかどうかDNAチェックを要求します

DNA  
チェックだと？

…それは  
心外ですね

アダモ艦長

我々は  
永世中立の  
立場を誓った  
軍人ですぞ！

これは頼んで  
いるのではない  
命令している

ちっ  
ここは受け入れる  
しかないか

…了解致しました

トリスタンの乗員  
全て問題  
ありませんでした

ではリブラまで  
よろしく頼む艦長

くっ…

艦長！

すぐに治療を！

ああ頼む  
…気分は最悪だ

放射能性の  
劇薬だが  
飲んだかいが  
あったな…

DNA情報の  
細工はできた

これで奴らに  
隙ができる…！



突撃!!



ついに来たぞ!  
この時が!



待...!!

何!?  
あれは...!!



深夜のパーティーなんて  
気がきいてるわねっ!

くそ...!  
謀られたか...!?

私の予想が  
正しければお前は  
ドニ・ボーガンだ

そうだろう?  
ドニ・ボーガン  
ん?





ちっ!

ははっ!  
どうしたの?

今ですぜ!  
艦長!!

こらっ……

ボーガン  
じゃない!?

なにっ!?

今度はその義手ごと  
叩き切ってあげる!!

…それはどうかな

そうだ!  
ボーガンは  
俺だあッ!!

気づくのが  
遅かったな!

貴様  
入れ替わって…!

…リエリ様

私たち  
こんなことをして  
いいんでしょうか?



不安なんです

なにかとても大切なことを忘れてるような…

なにを言っているの？

ご主人様を守ることに以上大切な任務があるというの？

まずいな……

リエリの方はまだしつかりと洗脳がかかっているようだ

ナオミの洗脳が解けつつある

これ以上は逃亡の邪魔……

ナオミ  
ちょっと来い

この壁に手を突いて尻を向ける

お前を犯してやる

え…でも…

どうした？  
イヤなのか？  
ならば殺してやる

どの道殺してやるがな

わ…わかりました  
…ご主人様…



貴様…

ドニ・ボーガン!!

洗脳が  
解けたか!?

まずい…!!  
銃が…!!

ハイ ハイ



黙れ!

私の本能が  
お前を問答無用で  
殺しておくと  
警告している!

俺を殺せば  
リエリがどうなるか  
わからないぞ!

待て!

死ね!  
ドニ・ボーガン!!

ここまで…か





魂を喰らう  
ヒトの天敵

悪魔

欲望に  
つけ込み



一方で――  
我々を守る  
存在がある



それが――



さあ今日こそ  
覚悟するのよ

魔王  
アザトリス



人々のために日夜戦う  
可憐な天使が登場！

愛の天使

ハニエル

～汚された純真～

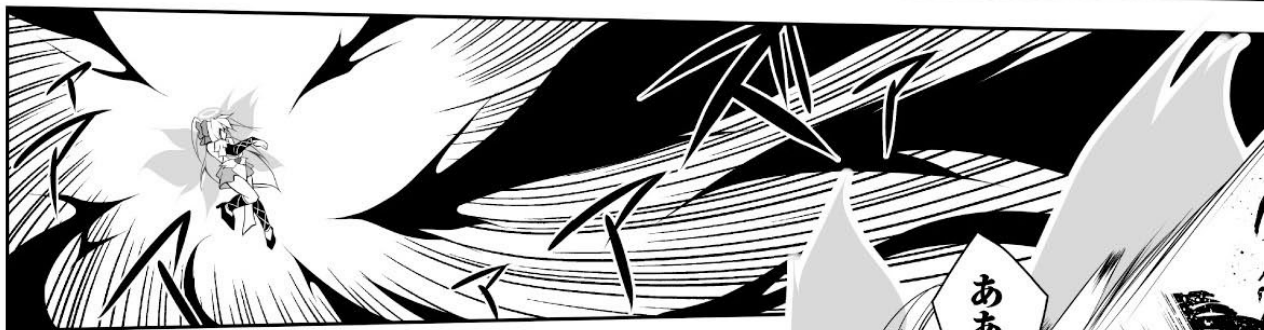
漫画 ぱふえ  
COMIC



ハハハハハ  
笑止！

権天使  
ハニエルよ

キサマの力で  
余にかなうと  
思うてか！！



ええい  
しぶとい！

ならば



私は…

あぁっ



決して  
負けない！

きやあぁ  
あぁあっ











人間から  
善き心が  
失われて  
いるからだ

なぜキサマの  
力が通じないか  
教えてやろう



く…私は  
まだっ

勝てない  
のだよ!

ッ!?



そんな…



神の調和より  
悪魔の快楽を  
ご所望さ



墮落せし  
人間は



神の力は  
ヒトの信仰心



キサマも  
墮として  
くれよう

嫌あつ!  
何するの

きやああ  
あああッ

こんな…  
破廉恥な

くっ…やだ  
はなして!







書いた通りに  
相手を操る  
力があるな

それが  
性感だ



天使様は  
どんな反応を  
するか



くく…では  
こう書くと



く…う…  
ハメ…て  
生…の  
おち…ちん

ハニエルの  
ここ…にい  
ハメ込んで  
犯し…て♡

ハハハハ  
本音はそうか

ち違う！  
私は何を  
言って…

残念だが  
それは

今のはっ  
毒の魔力の  
せいなの！

今…少し  
後でな







選択肢でいろんなエンディングが楽しめる分岐小説！

# 退魔剣士と淫

～処女肌に刻まれた邪術式～

退魔師少女の穢れを知らぬ素肌が  
淫語の群れに汚しつくされる！



あまとうき  
小説 天戸祐輝  
挿絵 アルデヒド  
NOVEL ILLUSTRATION

ご注意

この小説には分岐が設けられています。シーンごとに1～5の番号がふられているので、シンの小説本文末尾にある指示に従って、指定された番号のシーンをお読みください。



# シーン1

学園生や通勤のサラリーマンが早足で歩く繁華街の中。

路地裏から漂ってくる黒い霧のような魔の気配に、少女顔を顰めていた。

(こんなに朝早くからだなんて……)

十代後半にしてはやや幼く、それでいて整った顔を路地の奥に向ける。

靈感のある人なら、ある程度感じる魔の氣。

普通の人では決して感じ取れないその穢れた気配が、この奥から臭気のように漂っていた。

(靈感のある人が気づいたら大変ですね……)

大きく丸い瞳で路地奥を覗き、整った唇を引き締める。

御芝遥。

字こそ違うが、退魔一族の名門である苗字を持つ彼女は、この事態を見過

ごすことができなかった。

魔物のことなんて一生知らなくていい人々が犠牲になるかもしれない。

人々たちを守るために、登校中だった彼女はロングストレートの黒髪を靡かせ、ピンク色のセーラー服姿で路地へと足を踏み入れた。

(間違ひありませんね、この奥に二匹、穢れた者がいます)

左手に携えていた細長い紫袋から西洋刀であるレイピアを取り出し、鞘から銀色の刃を抜き放って先に進む。

細剣を引き抜いたと同時に両腕には

ガントレットが装着され、完全な戦闘態勢となつて裏路地に視線を向けた。

(すえた匂い、気持ちが悪くなりそうですね)

顔を顰めるような匂いが漂ってくる中を歩いていった彼女の瞳に、白い肌と魔物特有の硬質的な体軀が見えた。

「んあッ、あうッ、はうッはふッ……んチュパ、もう嫌……んぶううッ」

(うそっ!!)

表通りの音が聞こえない裏路地についていた遥は、思わず口を押さえてビル陰に身を潜めた。

(あ、あんなことを、こんなところでするなんて!!)

恥ずかしさで、この場所から逃げ出したくなる気持ちを抑え込む。

ビルに囲まれた奥には人狼とトカゲ人があり、自分と同じピンクのセーラー服の少女を二体がかりで陵辱していたのだ。

おそらく靈感が多少あり、運悪く魔氣に気づいて不用意に近づいてしまったのだろう。

その少女は無残にもセーラー服を引き千切れられ、四つん這いの姿勢で唇と膣孔を貫かれている。

(酷いですっ!! こんな、こんなつ)

初めて見る光景ではない。

退魔の仕事をしていれば、幾度となく目にする少女の哀れな姿だ。

しかし、まだ性経験のない遥はその状況に慣れていなかった。

しかも犯されているのは自分と体格が似ていて、同じ制服を着た少女だ。

つい自分とその少女を重ねてしまう。

(違う、あの子はわたしではないっ)

深呼吸を一つして気分を落ち着かせ、もう一度少女の姿を見てレイピアの柄を強く握る。

(酷すぎます、あんなに犯すなんてっ)

唇を噛み締める。

少女の唇や膣孔から溢れている白濁液の量、そして少し膨らんでいるお腹が、彼女が連れ去られたのが今日ではないことを物語っていた。

(許せません、すぐに助け出して穢れた仔が産まれる前に清めな……っ!!)

鈍く光る細い刃に靈氣を通した直後、なにもない空間に闇の霧が発生し、そこから滲み出すように大きな男が現れてきた。

「そろそろ頃合いのようだな」

見たところ三十代後半。

黒いスーツ姿のその男は、渋い顔に似合った低い声で陵辱少女を見つめる。

「どうだ? 人ならざる者に犯される気分は」

「んぶっ、ヂュブあ……もう、もふ許ひ……んぐぐぐッ!!」

犯されながら許しを願った少女が、深くペニスを膣と喉に突き込まれて呻き泣いた。

ブルンと揺れた柔房からは母乳が吹き出し、孕まされた魔仔が今にも産まれようとしているのが分かる。

「なかなか具合がよさそうだな。魔物どもが気に入っておまえを離さないで

はないか」

(なんなのあの男は。人なのに魔物を従えているなんて……。あれが、噂に聞く魔物召喚者?)

髪を少しオールバックにした男を瞳に映し、以前一族の中で聞いた話を思い出した。

「……っ!!」

心臓が一瞬止まりそうになった。

氣配を消していたのに気づかれたということは、この男がかなりの手練れであることが分かる。

(見つかった以上、仕方ありませんね) 一つ呼吸を整え、遥はビル陰からそ

れが動かない。

闇の中から男が現れた瞬間から身体が動かない。

心が、そして退魔師としての直感が危険だと物語っていた。

(こんなことで物怖じするなんてっ)

初めての感覚。それを押し殺しながら飛び出そうとした直後。

「そんなところに隠れてないで出てこい。こそこそ隠れずとも、この崇高な儀式を間近で見せてやろう」

「……っ!!」

心臓が一瞬止まりそうになった。

氣配を消していたのに気づかれたということは、この男がかなりの手練れであることが分かる。

見つかった以上、仕方ありませんね) 一つ呼吸を整え、遥はビル陰からそ

の身を現した。

「ほう、なかなかの者のようだな」  
「下から舐めるように這わされた視線に寒気が走った。」

遥は身長こそ低いが胸はCカップほどあり、腰が細いためにサイズ以上に大きく見える。

お尻もそれなりあるために、制服越しでも股体のラインが分かるほどだ。

この男の視線は、服越しでも直接肌を見ているような気持ち悪さ、そして値踏みをしているような下劣さを感じる。

「いやらしい目で見ないでください」

「そのような目でなど見てはいないただ、この娘のように私の役に立つてくれるかを見定めているだけだ」

「それが下劣なんですっ！」

視線が太腿に這ってきたと同時にレイピアを構え、剣先を相手に向けた。

「魔物を遠ざけて、その子を解放してください」

男に剣先を向けたまま、陵辱されている少女を解放するように促す。

これ以上の陵辱、普通の少女が耐えられるはずがない。

もしこのまま魔仔を産んでしまったら、精神が確実に壊れてしまう。

「解放しても構わないが、代わりにおまえが魔物を孕んでくれるのか？」

「ふざけないでください。誰がそんなこと」

「ふざけてなどおらんよ。この不条理

な世界を根底から覆すには人の力だけでは無理。故に異な力が必要なのだ」  
「だから魔物の、人ならざる者の力を使おうというのですか」

彼の言うことも分かる。

確かにこの世の中は不条理、不公平なことばかりだ。それは、自分の人生を振り返ってみても分かる。

同じ年の女子が遊んでいても、遥はその時間を修行に当て、人々を守るために使っていた。

しかし、それを理解したとしても、この男が言っていることが自己的すぎるのは確かだ。

「まるで神にでもなったような言いようです」

「そうならざるを得んのだな。そのためならこの身を魔に染めようと、小さな犠牲を生もうと手段は選ばん」

「小さな犠牲ってっ！」

怒りで全身の毛が逆立つ。

この男が言っている小さな犠牲とは、人外の仔を産まされようとしている少女たちだ。

そんなことを許すわけにはいかない。

「そんなことさせませんっ」

叫びながらも、初めて自分の言葉づかいが忌まわしく思えた。

この言葉づかいは、人・魔物、区別なく命に対しての礼節として躡けられ、慣れ親しんだものだ。

今さら変えることなどできない。しかも、遥の声は女の子らしく、声質での威圧感もない。

「言葉で圧せなくても、あなたを倒すことはできますっ！」  
「一気に間合いを詰め、レイピアを切り上げるように構える。」

「ふ、なかなかの瞬発力だ。しかし、この程度では」

「でしようね」

男の目の前で股体を九十度回転させ、さらに一歩踏み出して少女の脛を貫くトカゲ人に刃を振り上げた。

「これで一つはっ」

倒せる。

その確信を持って細い刃を振り上げたが、魔物を切り裂く瞬間で黒霧がレイピアに纏わりつき止められた。

「危ないな。騙されるところだったよ」

「今の攻撃を防御されるなんて思いませんでした。ですけどっ！」

「ぬうっ!?」

素早くスカートのポケットから退魔札を取り出し、腰を激しく振っているトカゲ人に叩きつける。

「ギャギギギギッ！」

パチパチと電気がショートしたような音と青白い光が瞬き、魔物が醜い声を叫びながら少女の股体から離れた。

「そちらもっ」

魔物が離れたと同時に、遥はレイピアを真つ直ぐ動かして人狼のお腹に突き刺した。

「ギャオオオオオオンッ！」

遥は退魔一族の中でも特殊な存在で、和の武器が一切使えないタイプだった。そのために、なぜか相性のよかった西洋剣であるレイピア、聖銀と鋼で鍛造された武器を使用しているのだ。

おかげで、この手の魔物に対しては圧倒的な戦闘力を有している。

「このまま霊氣を流して滅私っ!」

刃に霊氣を流して魔物の体内から焼き祓おうとした途端、真横から鞭のようにしなつた脚が瞳に映った。

（頭が砕けるっ）

一目でその威力が分かった遥はレイピアを引き抜き、スカートが捲れるのも構わずに高く飛んで距離をとった。

「今のをかわすとは思わなかった。そしてその判断力と霊力、強き魔仔を宿すのに相応しい母体のようだ」

男の目。いや目とさえ思えない暗い穴のような視線に貫かれ、全身に寒気が走る。

「我が名は依義宗礼、この世を破滅に導く悪しき者を潰すため、おまえの肉体を使わせてもらおう」

仰々しく言葉を吐いた宗礼が、遥に向かって手を差し伸べてきた。

まるで、自分の目的のために身体を差し出せ。と物語るように。

「ふざけ、ふざけないでくださいっ!」

誰があんなのような者につっ!」

怒りとともに、剣先を忌まわしい言葉を吐く喉に向ける。

「ギリリ、ギリリギリリリリ!」

だが、宗礼は微動だにしない。



そのかわり、先ほど退魔札で緑色の皮膚に火傷を負ったトカゲ人が、巨大な曲刀でレイビアを受け止めた。

「邪魔ですっ」

突然の防御だが、予想してなかったわけではない。

倒してない限り、彼らがどのような行動をするのか予測するのは、退魔師として当然だ。

遥は曲刀をガイドレールにするようにレイビアの刃を滑らせ、そのままトカゲ人の腹部を斬りつけた。

（浅いつ）

手応えで致命傷ではないことが分かる。

しかし、今はそれだけで十分だ。

人狼は未だにレイビアの攻撃で動けないため、少女の唇にペニスを収めたまま唸っている。

それに宗礼は動く気配さえない。

今なら少女を救えると踏んだ遥は躊躇るトカゲ人の横を通り抜け、人狼を蹴り飛ばして彼女から引き離した。

「ぶえっ、うげっ、うええええっ！」

少女の唇から大量の精液が吐き出され、コンクリートの地面を叩く。

「しっかりと、もう大丈夫ですから」

声をかけるが返事はない。

遥の腕に支えられながらぐったりと身体を横たえ、「はあはあ」と苦しげな呼吸を繰り返すだけだ。

「ほう、私の使役魔物を退けて娘を奪うとは、ますますおまえの身体が欲しくなった」

「わたしの身体はわたしのものです。それに、彼女の身体だって彼女のものだわ、あなたのものでも、魔物を産む道具でもありませんっ」

宗礼の考え、そのものを否定する。

己の目的のために女に魔物を産ませるなど、許せることではない。

「なるほど、おまえの理念は理解できた。私の考えに賛同はしてくれないよ、うだな」

「あたりまえです」

「しかし、その娘は遅かったようだ」

「なにを言ってる……」

「うあつ、うああああああああああああああつ！」

突然、片手で支えている少女が叫び、大きく両脚を広げてお尻を上下に振りはじめた。

目は瞳孔が散大して涙を流し、コンクリートの地面にお尻が叩きつけられる音が路地裏に響き渡る。

「まさ……か……」

「新たな命の誕生だ」

「人が、人が魔物の仔を……」

遥自身も初めて目にする魔物誕生の瞬間が起ころうとしている。

「が、我慢して。産んではダメです、産んでしまったらあなたが壊れ……」

「ぎゃひっ、ひぎい……っ！」

声にならない悲鳴。まるで魔物の鳴き声のような声を発した少女の胸から母乳が吹き出し、同時に裂けるほど広がった膣孔から成猫ほどの大きさのトカゲが飛び出した。

「ふん、少しばかりの霊力を有した娘では強力な魔物は産まれんか」

「あなたはっ！」

怒りとともに宗礼を睨みつけると、突然風切り音が鳴りセーラー服の胸元が引き裂かれた。

「きやつ」

片胸を包むピンク色のブラジャーが露わにされ、慌てながら片手で隠す。

「な、なにが？」

なにが起こったのか理解できない。

宗礼も魔物も動いてはいない。

それなのにセーラー服には次々と裂け目が刻まれ、ミニスカートにはピンクショーツが見えるほど淫らなスリットが作られた。

「なにか忘れていたのではないか？」

「っ!？」

考えても思い当たらない。

戦っていた相手は宗礼と魔物二体。そのどちらも瞳に映して注意は払っている。

それなのに、何もしない相手から攻撃を受けているのだ。

（わたしがなにを忘れていると……）

確かに最初に居た魔物は二体。しかし、よく考えてみれば今は違う。

それに気づいた遥が少女の太腿の間に視線を向けると、そこに居たはずの異生物が居なかった。

「まさか、もう動けるんですかっ」

産まれたばかりでもう行動できる。自然界の動物ではあたりまえのこと、

そして本能のまま生きていく魔物なら予測すべきことだった。

「生まれたばかりでも魔物は魔物。おまえが敵だと分かったのだから」

こればかりは宗礼に同意できる。

魔物としての本能が、自分を敵だと認識したのだろう。

だが、相手の正体が分かれば対処のしようもある。

幸いこの魔物は動きが素早いだけで攻撃力は低い。

遥は気配を頼りに、赤子魔物の動きを先読みして細剣を振った。

「ビィギィイィイィイッ！」

真つ二つにした魔仔が可愛らしい鳴き声を上げて落ち、コンクリートの地面でビクビクと痙攣し動きを止めた。

「残酷だな。それはその娘から産まれたのだぞ」

「人に魔物を産ませるなんて、絶対に許しませんっ」

精神が壊れた笑みを浮かべる少女を横目に、遥は激昂した。

◆魔物召喚者である宗礼を先に倒す  
↓ シーン2へ

◆先にトカゲ人と人狼を滅する!  
↓ シーン3へ

## シーン2

「はあはあ……っ」  
「実力が違いすぎるっ」

宗礼を前に、遥はそれを実感させられていた。

戦い始めて数分程度。

その間に休むことなく攻撃を仕掛けているが、どんなに早く動こうとも相手を捕えることができない。

過剰な運動量にセーラー服は半分透けて肌に張りつき、スカートの刻まれたスリットから見える太腿には、玉のような汗が幾つも伝っていく。

「なかなか艶めかしい姿だな」

「いやらしいっ」

透けたピンクブラを見られ、軽く腕で胸を隠したときだった。

「そんなことを言われても、こうも見せられてはな」

「ひやうっ」

「なかなかよさそうだ」

突然宗礼が目の前から消え、遥を背後から抱きしめて柔房を揉んできた。

胸に初めて感じるくすぐったさ。

その轟惑的な焦燥感を覚えながら、初めて戦闘中に混乱してしまった。

なにが起ったのか理解できない。

まるで、一瞬自分の時間が止まったかのようだ。

宗礼の手は感度を確かめるように柔房を揉み、大事な部分をさわろうとスカートを捲ってくる。

「抵抗しないとは、私のものになる覚悟ができたようだな」

（て、抵抗……っ）

「さ、さわらないでくださいっ」

言われて初めて気がついた。

あまりの出来事に思考が停止し、彼を振り払うのを忘れていた。

宗礼の言葉でそのことを思い出した

遥は暴れ、レイピアを振り回すようにして背中から回された腕を振り解く。

「こ、こんなことをするなんて、なんて不埒な人なのですかっ」

自分の顔が真っ赤になっていくのが分かる。

揉まれてしまった胸にはまだその感触が残る、捲られかけたスカートがまだ乱れているような気がした。

「不埒か、だがおまえの身体は喜んで

いるようだったぞ」

「喜んでなんていませんっ」

あまりの恥ずかしさに再び切りかかるが掠りもしない。

ただやみくもに細剣を振り回している。そんな気分にはさせられた。

「剣が乱れているぞ」

「そんなことありませんっ」

「そうか、ならばその程度がおまえの実力ということか」

「バカにしないでください……はふっ」

激昂しながら叫んだ瞬間、剣線上にいた宗礼が消え、再び背後から肢体を抱きしめ両胸に触れてきた。

手は制服と下着越しにもかかわらずCカップの果実を歪め、敏感な部分を

見つけて指先を押しつけてくる。

「このっ」

レイピアを逆手に持って背後を突き刺すが、彼は再び消えて目の前に現れてきた。

胸には妙なくすぐったさが残り、見えているカップに小さく勃たされた頂

が浮かび上がる。

「そる姿だ」

戦いだけではなく、悪戯されているという点でも完全に遊ばれていた。

しかし、その屈辱を感じながらも、剣を止めることはできない。

止めてしまえば、そこで敗北が決定してしまう。

「ここであなを倒さなければっ」

犠牲者が増え、この世界が魔物に蹂躪されるかもしれない。

そうさせないために、遥は決死の思いで突きを放った。

「きやうっ!!」

細い腕に痛みが走る。

宗礼は避けることも、消えることもせずに遥の腕を掴み、渾身のレイピアを止めていた。

（なんなのこの力……）

手首に痛みが走り、今にも腕が握り潰されてしまいそうな力だった。

「あきらめて私の道具になれ」

「ひうっ」

宗礼に引き寄せられ、キスするほど顔を近づけられながらスカートの中心に手を差し込まれた。

「ど、どこをっ」

「この具合も確かめたいのでな」

「つつっ」

人のものとは思えないほど熱く、それでいて汗一つ掻いていない大きな手が太腿を辿ってくる。

「んう……さ、さわらないでください、つ、それ以上は……ふうああっ!!」

気持ち悪いくすぐったさが太腿を這い上がり、背筋まで寒くなる。

拒もうと太腿を締めつけてみるが意味はなく、彼の手は邪魔などなかったようにショーツに触れ、布越しに淫唇を擦って膣孔を騷つてきた。

「はうっ、へ、変態っ、女をなんだと思つて……」

「いい反応だぞ」

「んうううっ」

サテンの布と太い指がぶつくりとした淫部を撫でまわし、太い指が楕円形に捻じられた淫唇の縁を辿ってくる。

その耐えようのないムズムズとしたくすぐったさに全身が震え、呼吸が荒くなっていく。

嫌だと感じていても腕を掴まれた肢

体は相手から離れることができず、指が布越しに膣孔を探り当ててくる度に

全身の力が奪われていくようだ。

「や、やめて……やめてくださいっ。この強姦魔っ!!」

「ぬうううっ!!」

このままでは犯される。その事態を避けるために遥は掴まれている部分に靈氣を集中させ、電気シ

ョートのように火花を放った。

「はあはあ……い、いやらしい、最低



ですっ」

人とはいえ、過剰な霊氣はダメージを与えられる。

初めて一矢報いた遙は息を乱しながら、火傷した掌を眺める宗礼を睨みつけた。

「私に怪我を負わせるとは、その霊氣を有する身体と子宮、ますます欲しくなったぞ」

一瞬、寒氣が走るほど不気味な笑みを見せた宗礼が消えた。

「貰うぞ、その子宮を」

驚く間もなかった。

また背後から肢体が抱きしめられ、魔仔に引き裂かれた部分から直接滑らかな下腹部に掌を押しつけられた。

「は、放してくださいっ。これ以上いやらしいことを……っ」

腹部に当てられた掌が焼けた鉄板のような高熱を放ち、胎内をぐつと押されるように肌に食い込んでくる。

「熱っ、あぐっ……くっ、くあああああああああああっっっ！」

痛み、そんな生易しいものではなかった。

まるでお腹を掌で突き破られて子宮を掴まれ、炎を埋め込まれたような激痛と灼熱感に全身が痙攣する。

下腹部から全身には魔氣が送られて広がり、何万ボルトもの電氣を流されたような撃痛が肉体の内を走りまくっている。

「あぐっ、あつ、あぐうあああつ！ひぎいいうううううっ！」

限界を超えた痛みによって身体が痺れ、自然に溢れた涙が頬を伝った数秒後、やっとな魔氣の放電が終わり崩れ落ちることができた。

しかし、すぐに回復することはできずコンクリートの地面に両手をつき、息を荒らげながら宗礼を見上げることしかできない。

下腹部にはまだ痛みが残り、肌が火傷したように赤くなっている。

「これで私のものになる覚悟ができただろう」

「い、意味が分かりませんっ」

まだ痛みを感じながらも立ち上がりレイピアを振り上げた。

今までで一番悪い攻撃を宗礼は薄ら笑いながら避け、なにも言わずに表通りに向かっていく。

「ま、待ちなさい……っ!」

優勢なのに去っていく理由が分からないまま追う。

だが、その追跡を阻止するかのようになんか手を出してこなかった二体の魔物が眼を光らせ、遙の肢体を狙って背後から襲いかかってきた。

「い、いい加減にしなさいっ」

下腹部の痛みはまだ残っているが、獣欲を丸出しにした魔物に負ける気などしない。

遙は流れるような動作でトカゲ人の胴体を斬り離し、突きで人狼の喉を貫いた。

「ごめんなさい」

声も上げさせずに倒した魔物にボツ

りとあやまり、宗礼の後を追って表通りに飛び出す。

(ど、どこに行つたの?)

遙の姿に驚く人々の目に恥ずかしさを覚えながら、片腕でブラを隠して宗礼を探した。

(早く、早く見つけ出さないと)

急いで男の姿を探すがどこにもいない。

焦る気持ちを抑え、新たな犠牲者を出さないために走ってみるが、やみくもに探しているだけでは意味がない。

ただ、肌を露出させた制服姿で街中を歩いているだけだ。

すれ違うサラリーマンたちは、所々破けたピンクのセーラー服の隙間からブラを覗き、可愛いらしい形のお臍を目に焼きつけるように見つめてくる。

中には立ち止まってスリットを刻まれたスカートを凝視してくる人までおり、ピンクのショーツ、それも一番大事な部分に視線が突き刺さっているのを感じた。

(そんなに见なくても)

登校中の学園生はほとんど居ない。

だが、そのかわり通勤中の会社員などの姿がかなりある。

その男女問わない多くの人たちが遙の姿に驚き、興味本位にその露わな制服姿を見ていた。

(い、一度帰って着替えても……)

「よう彼女、そんな恰好でどうしたの」「こんなに下着見せちゃって、露出狂のサセ子ちゃんなのかな?」

「えっ?」

突然声をかけられ、自分と同じような年齢の男たちに取り囲まれた。

「なんですか、あなたたち」

見るからにガラの悪い彼らを睨みつける。

今、こんな人たちに構っている時間などない。

「冷たいなあ、こんなにエロい恰好しているのに」

「きやつ」

いきなりスカートを捲り上げられ、ショーツ越しにお尻をさわられた。

「な、なにをするんですかつ」

「なにつて、そんな恰好しておいて清纯ぶられてもな」

「ひやひや、純情なふりしながら無理やり、つていうのが興奮する変態ちゃんじゃねえの?」

「や、やめ……っつっ」

男たちは十数人。

全員仲間であるう彼らは遙の身体に手を伸ばし、街中にもかかわらず胸やお尻、首筋まで撫でてくる。

「へへへ、柔らけえ」

「可愛らしいブラに乳首浮き上がらせて、そんなに純情ぶるなよ」

「うわっ、なんかパンツ濡ってんじやん、下着見せて興奮してるみたいだぜ、このエロ女」

何人もの手がブラ越しに乳首を、ショーツ越しに淫唇を割り広げて膣孔まで擦ってきた。

「や、やめてください……、こんなこ

と……あふつ」

いきなり抓まれた乳首と淫核の刺激に、思わず肢体が震えて甘い声が出てしまった。

宗礼に嬲られて敏感にされてしまっていたそこは、今の遥にとつて最大の弱点になっていた。

少しさわられただけでブラカップに乳芽の形が完全に浮き上がり、強烈なムズ痒さが肉果実を蝕んでくる。

大事な部分は布越しに淫唇を辿られ、柔らかな女肉を弄ばれる度に愛液が溢れてピンクショーツに淫らな染みが広がっていく。

「さわらないでください……っ、どうしてそんなところを……はうつ」

「どうしてって言われてもなあ」

「こんな恰好で歩いているエロ女見たら、さわるなっていうほうが無理だぜ」

「おまえだって、早く俺たちのモンが欲しくて濡らしてんだろっ」

（こ、この人たち……）

倒す気になれば一瞬で倒せる。しかし、一般人である彼らを攻撃することに戸惑いを隠せない。

魔物やそれに類する人を倒すための力を普通の人に使ったら、攻撃を受けた人はただではすまない。

しかし、男たちはそんな気持ちなど気にも留めず、通勤中のサラリーマンたちに遥の淫姿を見せつけるようにさわってくる。

「や、やめてくださいと言ってます。こんなことをして恥ずかしいので

すか……」

「そんな恰好で歩いてるおまえのほうが恥ずかしいのかよ」

「今から俺たち全員で相手してやるって言ってるんだから、さっさとパンツ脱いでマンコ掲げろよ」

「なっ、なんて卑猥な言葉をつ!!」

彼らの勝手な言い分、そしてその口から出るいやらしい言葉に腹が立ち、思わずレイピアを強く握りしめた。

「いい加減にしなさいっ」

さすがに、こんな恥辱をこれ以上耐えられない。

遥は大きな声で叫ぶと同時に数人の男の頬を叩き、さらに数人のお腹に拳と膝を叩き込んだ。

「ぐあっ」

なにをされたかも分からない男たちが呻き、地面に崩れ落ちた。

「恥を知ってください。こんな不埒なこと、あなたたちはどういう教育を受けてきたのですかっ!」

彼らを叱り、睨みつける。

「ふ、ふざけんなよ、この雌犬がっ」

「だ、誰がめ、雌……っ」

反撃のようにぶつけられた言葉に、思わず言葉が失う。

獣のような魔物とは何度も戦い慣れていたが、自分をその獣と同じにした罵声を受けるのは初めてだった。

めた遥は、そのまま瞳を震わせた。

下腹部。ちょうど宗礼が触れた部分にトランプのダイヤのような形が浮かび上がり、その四辺の外側に卑猥な文字が浮かんでいる。

「こ、これって……」

背筋が寒くなる思いだ。

これはただの痣ではない。

おそろく呪術式の一つ。

このままでは身体に、もしかすると魂にまで変調をきたしてしまうかもしれない。

「こんなエロい文字をお腹に書き込むなんて、とんでもない淫乱だよなあ」

「ち、違いますっ、これはわたしが書いたものでは……はうつ、んっ、んああああ……」

一人の男がお腹のマークに触れただけで全身の力が抜け始めた。

肌はムズムズと痒くなり、さわっていた男たちを振り払ったはずの胸や淫部が疼きだしていく。

「はああ……んう」

お腹のマークをさわられてるだけで、それだけなのに全身が熱くなり、ショーツの中が蒸れて布が肌に張りついてくる。

「腹をさわられただけで感じてるぜ、この雌豚っ」

「性感帯だからわざとそんなの書いてんじやねえの、ほんとにエロい女だよな、ははっ」

「変な、変なことを言わないでください。これはわたしが書いたものでない

いとさつきから……はうつ、きやううつ」

別の男が文字に触れながらブラ越しに乳首を抓んできた途端、遥は全身を震わせてしまった。

「な、なに今の……はうつ、んうつ、はああああ……」

手が次々と肌に這われ、太腿やお腹、淫部やお尻までさわられ始めた。

遠慮のない手は下着越しにもかかわらずお尻の割れ目や淫唇を捻じ、布ごと膣孔と尻孔に触れてくる。

「けが、汚らわしいですっ、そんなとこ……はああ、もうやめ、あつ」

偶然を装った指に陰核がさわられた瞬間、遥は一瞬体重が消失したような浮遊感に襲われて愛液を吹き出し、とうとう太腿に淫らな糸を伝わせてしまった。

辺りにはムツとした女の子の匂いが立ち込め、遥が軽くイッてしまったことを物語っている。

「ああははは、さつきの皆さんが言っていた通りみたいだぜ。文字さわった途端感じて愛液垂らしやがった」

「んっ、そ、その男の人って……っ?」

◆情報を教えてもらう ↓シーン4

◆不確定な情報より、自分で探す ↓シーン5





### シーン3

(ここ……は……?)

硬い床の感触を背中に感じながら、遥は深い意識の底から目を覚ました。

ぼやけた視界で周りを確かめるが、周りは見たこともない景色。

ただ広くて、なにもない場所だ。

しかし、なぜか自分の周りだけスポットライトが当てられ、やたらと明るく、そして暖かく感じていた。

(わたし……?)

「んあううううっ!!」

ぼくっとした意識の中、突然感じた淫部のムズ痒さに肢体をはねあげる。

「な、なんですいったいっ」

大事な部分からの刺激に身をくねらせながら上半身を起してみると、おぞましい光景が瞳に映ってきた。

小手とソックスしか身につけてない肢体。そして、捻じられた両脚の間には人狼が頭を割り込ませ、誰にも触れさせない淫部を舐めている。

「なにを、やめ、やめなさいっ、そこから離れ……」

じゅろ……。

「くうふっつっ」

何分間、何時間こんなことをされていたのか分からない。だが、淫部に触れてくるヒヤリとした空気の感触で淫唇が開ききっているのが分かった。

ザラザラとした人狼の長い舌は楕円形に広がった淫唇もろとも薄赤い粘膜を何度も舐め、股間の匂いを嗅ぎなが

ら処女孔に舌先をねじり込ませようとしてくる。

(どうしてこんな……)

意識を失う前のことを思い出してはつとなる。

魔物を先に倒そうとした遥だったが、突然背後から攻撃を受けて気絶させられてしまったのだ。

おそらく、その攻撃をしたのは宗礼だとしたら、この場に彼が居ないはずがない。

遥は股間に顔を埋めている人狼の頭を両手で押さえながら瞳を動かし、自分をこんな目に遭わせている張本人を探した。

「やっと思が覚めたか」

「あ、あなたですか、こんな下劣なことをしたのはっ」

「すまないな、観客からの要望だ」

「観客? 観客って……きやああああああああああああっ!!」

見つけた宗礼の言葉で、再度周りを確かめた遥は喉が張り裂けるほどの悲鳴を奏でた。

ここはただ広い空間ではなく、舞台上だったのだ。

しかも、暗い舞台下には何十人もの男がおり、魔物に翻られて自分の姿を眺めている。

「な、なっ、なんなのですっ!!」

「彼らは私の賛同者だよ。魔物の交尾が見たいと言うので招待した」

背筋が、そして全身が寒くなる。

宗礼は自分が魔物に犯される姿を観

覧させようとしているのだ。

「だ、誰が魔物なんかとっ」

「だが、おまえの相手は興奮し、これ以上我慢ができそうにないぞ」

「我慢……」

股間の人狼に瞳を向けた途端、その魔物は欲情した眼を赤く光らせて両足首を掴み、遥の股関節が外れるほど両脚を左右に広げた。

唾液を塗された淫部は膣の中にまでヒヤッとした空気が入り込み、観衆の視線が誰にも見せたことのない部分に突き刺さってくる。

「あふっ、見ないで、見ないでください……あくっ、ああ……っ、っ」

舞台下を見ながら頼むが、観客たちが目を背けることはない。

彼らの目は魔物のように光、露わにされた柔房と舐められている淫部を凝視している。

「見ないでと頼んでいるのに、どうして誰も……っ!!」

グチュ……。

せめて胸を隠そうとした瞬間、舌先が膣孔に突き刺さってきた。

「はぐっ、ひいひいひいひいっ!!」

抵抗する間もなく小さな膣孔を歪めて入り、グニグニと曲がりながら膣壁を舐めてきた魔舌に半狂乱になって叫ぶ。

胎内を舐められるおぞましさに肢体は何度もお尻をはねあげ、少しでも気持ちの悪い舌を受け入れないように膣全体を締めつけた。

「入って、舌の中に……あくっ、あぐうううっ」

悲しみの涙が瞳に溜まる。

どんなに抵抗しても膣内は異物を止めることができず、膣壁がザラザラとした犬舌に舐められ穢されていく。

「はあくううっ、あつ、ひいやああつ、中舐められて……うっ、お腹の中で舌が……あうっ、はあはあはあ……っ」

楕円形に捻じられた淫唇に吸いつくように人狼の口が押しつけられ、じゅろじゅると愛液がすすられる度に思考が白濁する。

魔物に翻られるなんて拒絶以外の感情が生まれるはずなのに、膣壁を舐められる度に焦燥的なムズ痒さが下腹部から全身に広がってきた。

「んうっ、あつ、はあはあはあ……はあうううっ、んっ、ああつ」

(どうして……、嫌なのに、舐められるだけで抵抗できなくされるなんて)

全身から力が抜けていく刺激に両手が床を掻き塗り、汗が吹き出した胸が大きく揺れる。

淫部からはピチャピチャといやらしい音が何度も鳴らされ、見ている観客たちに愛液の音を聞かせてしまう。

「ふふ、なかなかいい姿だぞ」

「あくっ、そ、そんなこと言わないでください……んん……っ!!」

宗礼の無感情な言葉に答えるも、不意に膣孔から抜けた舌の刺激に全身が痺れ、軽い絶頂に昇らされてしまった。

ぶっくりとした淫唇はヒクヒクと蠢



魔術師の家系だった  
祖父の家の蔵で見つけた古書

…「ここでトカゲの  
尻尾を捧げる」…か

暇つぶしに  
その本に載っていた  
儀式を行った

魔法なんて  
信じていなかった

妖しげな儀式から  
現れたのは……!?

シューウウウ

これはもしかして  
本当に…!?

…だが

その日  
俺は

貴様が  
魔術師か…?

…あ…ああ

…ふっ

にゃ、

悪魔を召喚した

我はアスラ

望みは何だ？  
魔術師よ

スタイル抜群の悪魔っ娘が  
男の欲望の捌け口に！

いなり  
言 Devil  
デビル

まっなみるみ  
漫画 松波留美





この世の破壊でも  
征服でも

好きな物を  
願うがよい

さあ…  
望みを言え



悪魔アスラ  
…だったな

くっく

いい体してる  
じゃないか



その牀で俺の  
性欲を満たして  
もらおうか

はっ!!  
断る!

誰が貴様に  
奉仕などする  
ものか

身の程を知れ!  
この新米魔術師



我を呼び出した  
魔術師だからと  
大目に見ると  
思ったか

我を御する魔力も  
無い人間風情が！

キッ



悪魔に  
無礼な事を  
願った罪

貴様の命で  
償ってもらおうぞ！



や…ヤバイ！  
殺される！！

嫌だ！  
死にたくない！

…！  
そうだ！！

こういう時の対処法が  
本に載ってたはず！！



このページに  
こう…書けば…

…何だ…?

同じ位置に  
意味のある言葉が  
浮かび上がる…!

ふんず

く…!?

力が…  
入らない…だと…!?

き…貴様!  
何をした!?

魔力の無い俺でも  
悪魔を呼び出せる程の  
古書なんだから

悪魔を制御できる  
魔力を秘めていても  
不思議じゃない…

ロヤ

…ってことか

…どういう  
意味だ…!?

この本の絵に  
文字を書き込むと

その文字がお前の  
体に浮かび上がる

文字を書かれた  
悪魔は

その文字の  
通りに行動する

つまり

お前は俺には  
逆らえない!!

馬鹿な…!

ま

て

…は…

「お前の  
体には」

ぐん!?





この本がある限り  
お前は俺の奴隷  
なんだよ…!!

主人である  
俺をイカせろ!

ちゅっ  
んっ  
んっ  
んっ

ちゅっ  
んっ  
んっ  
んっ

あ……  
苦し……

ちゅっ  
んっ  
んっ  
んっ

んっ  
んっ  
んっ  
んっ

…人間…ごときが  
悪魔に…敵うと…  
思っている…のか…

思ってたねーよ

だからこの本に  
頼ってるんだよ

次は…  
これだな

ハイス

まゆっ



そのままおっぱいで  
しごいてくれよ

パイズリの為に  
あるような  
おっぱいだ！

肌もすべすべで  
最高だな

…くッ

ア  
ニ  
ニ

フニ  
フニ

パイズリ  
OK

フニ

んん

パイズリ  
OK

パイズリ  
OK

パイズリ  
OK

パイズリ  
OK

…そろそろ…  
いくぞ!!

こちらにも一匹…



調子が悪い原因は  
風邪？インフルエンザ？  
それとも…死神？



続・死神のお仕事

ふたご巫女  
十二巻

怨霊退散！！



漫画  
COMIC

かのう  
嘉納あいら



## あっさり



如月珠音  
如月神社の双子巫女の姉。おっとり巨乳で、男の靈に憑かれやすい。



如月鈴音  
如月神社の双子巫女の妹。霊力は弱いがしっかり者の常識人。



真中  
如月神社に押しかけて居候している17歳。珠音の中学時代の同級生。



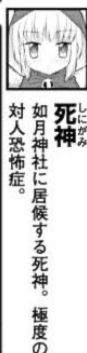
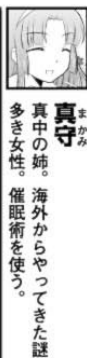
## 身に覚え無し



## やれる範囲で!!



## 生きる価値なし？







打つ手がない！

帝国との国力は  
純兵力だけでも  
10倍

差は歴然だ

まして我が国は  
先の司祭の謀略で  
一度は王城まで  
落とされている

將軍はか  
練達の軍人の  
大半

…ばかりか  
国王陛下王妃  
王子までも  
失ったのだ

軍事協定が  
あるわけでもない  
南東諸国が応援を  
出すはずもない



…もとより我が国は  
国王陛下が間に立て  
白騎士殿個人と  
聖教会の約定によって  
存在を許されていた  
ようなもの…

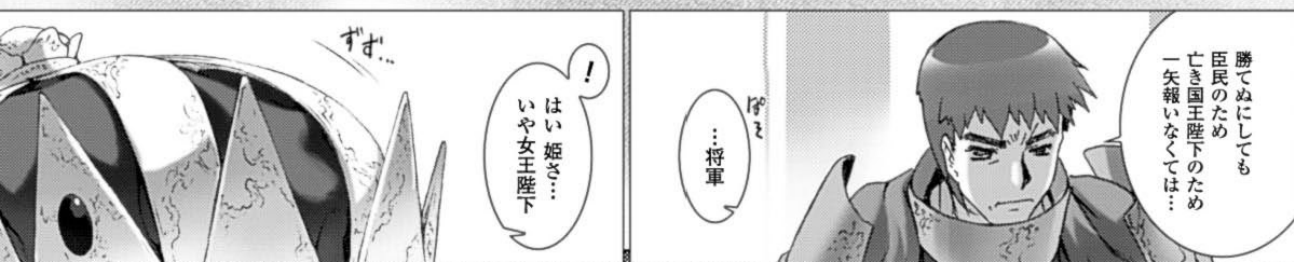
おい

ここは  
失言

いや事実だ  
大人しく降伏するのが  
賢明というものが  
失ったのだ

しかし

そうだ  
こちらが仕掛けたなら  
いざ知らず  
約定を違えたのは帝国だ



勝てぬにしても  
臣民のため  
亡き国王陛下のため  
一矢報いなくては…

…將軍

！  
はい姫さ…  
いや女王陛下



ええと

助けてもらいたけれど  
お願いできる国がないの  
ですよ…？

さよう  
然様です

それでは…あの

魔族のかたに  
お願いしてみても  
どうでしょうか



対価は我が眷属が  
人界に留まるに十分な魔力



よからう  
人間の姫

そなたの願い  
叶えてやろう





おお...う  
本当に陛下は

手とお口の扱いが  
お上手だ...



...そんな淫らさも  
愛おしくて  
たまらない...!

うっ!

あっ

くっ...  
魔王の鎧さえ  
なければ  
こちらに...

身の程を弁えよ  
そこは王になる方の  
ためのもの

我らは陛下の求めで  
精を捧げる代わり  
に  
快楽を頂いている  
立場だぞ...っ



何度でも  
できそうだ

それにこの胸:  
何かなさるたび  
誘うように揺れて

とろけそうなほど  
やわらかいというのに  
ひとたび挿入れば  
纏いつくように...



しかしお尻は  
相変わらずですな



一度出す間に  
二三次は  
達せられてしまう



# Lust Resort!!

ラストリゾート ぼろっす SIX'S

MISS BLACK





——その元となる  
精の供出

魔力への変換のため

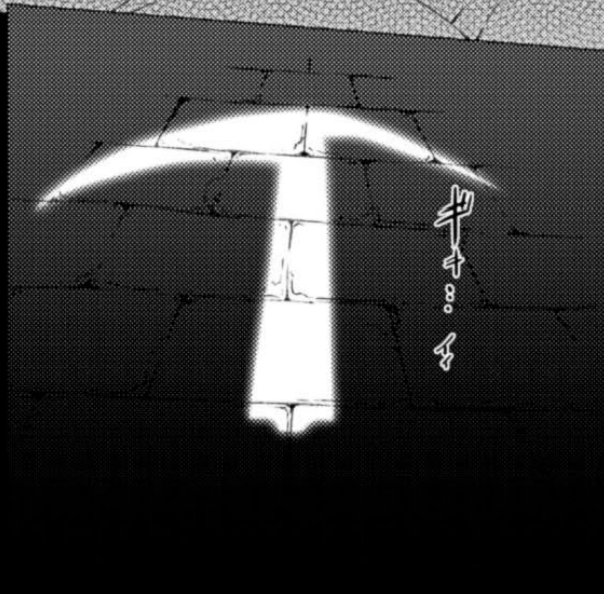
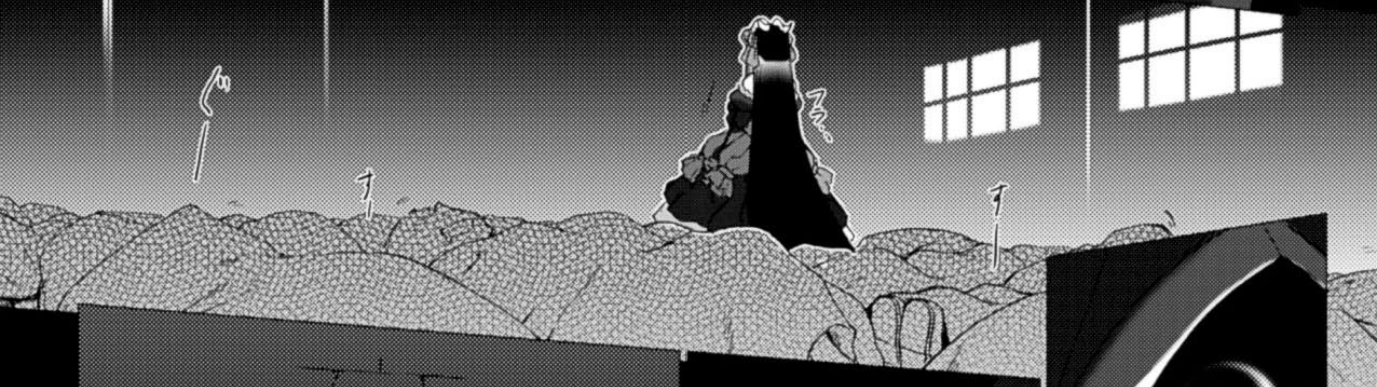
また人界での秘の  
玉座としてそなたの  
体を借り受ける

その器量なら  
精を集めるのも  
容易かろう

みなさん  
今日もありがとう  
ございます

えと…  
ごちそうさま  
でした









王たる者  
眷属に糧を与えるは  
当然のこと

おお魔王様

魔王様

魔王様

週に一度  
この身を介して  
日々集めた精を  
分け与えるのだ

フワ  
フワ



おおまたせして  
ごめんなさい…

え…と…ちゃんと  
おいしくできていたら  
いいんです…けど…



フワ  
フワ



ふふふよいぞ剛魔将  
いつものように思い切り  
握りつぶしてみよ



あつ!?  
あのやさしく



では魔王様  
今宵も食前酒から  
参りましょうか

あつ



ふやあああああつ







ウフフ

こちらも  
良い具合になって  
参りましたね魔王様



あんっ



ひう…  
おむね…  
はじけちゃ…た

ひっ



は…ひい…

おねがいます…  
ももう…ださせて  
ください…

ウフフ

いけません  
ココは戦勝の日の祝杯に  
とっときませんと

その時まで  
じっ…くり焦らして  
寝かせますからね



どうぞ…  
みなさん

いつものように…

いつはい…  
きもちよ…

めしあがって…  
ください…



くくでは姫  
食事ををはじめようか

…はい…



淫語に塗れる  
美少女モデルの被虐劇!

# 筆狩師エリナ 外伝

ちくま じゅうこう  
小説 筑摩十幸

挿絵 とうきくう  
ILLUSTRATION



この物語は...

美少女モデルであり、魔を祓う筆を操る退魔師でもあるエリナ。彼女は失踪した母・那海の足取りを追って、宗教団体の運営する学園に潜入するが、そこを支配する妖魔「刃々牙」のボスである黄により、肉奴隷人形「バンヴォーラ」へと仕立てられてしまう…。



横浜にあるKKアリーナは大勢のマスコミ関係者で溢れかえっていた。催されているのは聖天という中堅ブランドのファッションショーで、普段ならそこまで注目されることはない。

しかし人気絶頂の美少女モデル岬エリナが出演するとなれば話は別だ。しかも休養宣言した後に、電撃的に事務所を移籍したこともあって、世間の注目はさらに集まっていた。

「マスコミの皆さん、ようこそいらつしやいました。岬エリナの移籍記念、聖天ブランドによるファッションショーの開演でございます」

司会の声に続いて会場内に無数のライトが煌めき、鼓膜を突くような大音響がビートを刻む中、ステージに一人の少女が颯爽と姿を現すと会場のボルテージは一気に盛り上がった。

(……私がどうしてこんなことを……)

周囲の盛況とは裏腹にエリナは内心、身を焦がさんばかりの屈辱を噛み締めていた。「パンヴォーラ」に改造された人造の肉体を見世物にされるのは屈辱以外の何物でもない。

「さあ、前へ進むのだ、エリナ。その美しい身体を見てもらうのだ」

頭の中に黄の音が響く。場内のどこかで、エリナの痴態を観賞しているのだろう。

「あう……わ、わかりまし……た……」

悔しくて仕方がないが、脳内に埋め込まれたパイオチップが逆らうことを許さない。パンヴォーラにとってマスターは絶対の存在なのだ。

エリナが長く突き出したステージの上を進んでいくにつれて、観客は大きくどよめいた。

「……す、すごい」

エリナが身につけているのはピッタリと身体にフィットするボディコンドレス。桃色の扇情的な生地は美麗な身体を浮かび上がらせ、蜂のよう

にくびれたウエスト、さらにツンと高く持ち上がったヒップとそこに刻まれた深い谷間までも手に取るようにわかる。

しかしカメラマンたちの度肝を抜いたのはそれだけではない。なんと胴体部の前面と背面は極薄のシースルーになっており、形よく盛り上がった双乳、縦長の上品なお臍、神聖なる魅惑のデルタ地帯までもが、透けて見えるようになっていたのだ。

下着の類は一切着けていないようで、乳輪に埋もれた陥没乳首や縦に走るスリットまでもが透けている。それまでのお嬢様路線とは一線を画す過激なセックスアピールは、報道陣の度肝を抜いた。

それだけでも観客は絶句状態だが、エリナの身に施された仕掛けはそれだけではない。

妖しく輝く肌には「Fuck」や「SEX」などの卑猥な英語が書き込まれ、「何か」のリモコンらしきものが太腿の網タイツに突っ込まれ、そこから伸びたコードが股間のほうへ潜り込んでいくのだ。

「全部透けて……オッパイ丸見えだぞ」  
「ひよつとして、あれパイプなんじゃ？」  
「イメチェンしたっていうけど、これほどとは」

「パシャ！ パシャ！ パシャ！ パシャ！」  
爛れたような熱気と興奮が渦巻く会場を、ストロボの閃光が埋め尽くした。

(ああ……撮らないで……こんな恥ずかしいことさせられるくらいなら……死んだほうがマシよッ) 素肌突き刺さる無数の視線を意識すると、カーッと身体が芯が焼けて恥辱のあまり舌を噛み切りたくなる。特に永久脱毛されたワレメまで見られていると思うと死んでしまいたい気持ちになるが、埋め込まれた人工の心臓は決して止まることはない。

「フフフ、お前は死ぬこともできない人形なのだ。さあ、踊れエリナ。踊るのだ」

BGMがさらにアップテンポなものに変わり、エリナも華麗にステップを踏みボディをくねらせ始める。照明もムーディなワイン色になってエリナの肢体を妖艶に輝かせた。

そこへバックダンサーと思われる屈強な男たちも現れて黒髪的美少女モデルを取り囲み、ステージはコンサート会場のような華やかさで観衆を魅了する。女優やアイドル活動もしているエリナらしい演出とも言えるが、男たちと腰を前後に振りあつたり乳房を揺さぶる振り付けは、セクシーという言葉では収まらないほど、性的アピールに満ちている。

「くっ……あ、あなたたち……刃々牙ね……」  
「へへへ。たつぷり可愛がつてやる」

群がる男たちはいやらしい笑みを浮かべると、愛撫でもするかのように掌を肌に這わせてきた。

「う、うああ……はなれなさい……はあうっ」

敏感な脇腹を、柔らかな尻タブを、くびれた腰をいやらしく優しく擦られるたび、電流にも似た甘美な刺激がエリナの神経に流れ込んでくる。改造された肉体は全身が性感帯といつてもいいほど感じやすく、思わず嬌声が漏れそうになる。

「お前がエロ人形にされちゃったことを教えてやったらどうだ？ ついでにここに黄様の赤ちゃんがいることもな」

「き、汚い手で触らないで……ふぁあん……あなたたち……許さないわよ……あぁあんっ」

「生意気な口が叩けるとは、さすがエリナ様だ」  
「グウウウウンッ！ グウウウウンッ！」  
リモコンのスイッチが押入れられ、膣と肛門に埋め込まれたパイプが握ね回すような振動を開始した。

「ンアッ……そんな……ハウン！」

なんとか快楽から逃れようとするのだが操られた身体はまったく言うことを聞かない。それどころか媚びるように身をくねらせては、音楽のリズムに合わせてお尻や胸を観衆に見せつけてしまうのだ。

久しぶりにエリナを書くことができて、とても楽しく、とても嬉しかったです。機会があればまた書いてみたい。需要があれば、ですけどね。



「やべえ……なんて色っぽい貌だよ」  
「本気で感じてるんじゃないのか？ 演出つてレベ  
ルじゃねえぞ」

「ち、ちがう……私は……操られて……」

夕立のようなフラッシュを浴びせられ、羞恥の炎  
が魂を焦がす。だが羞恥や屈辱が大きいほど、改造  
ボディは被虐の快楽を生み出し、脳内魔薬を分泌さ  
せ、エリナをより淫らな人形に変えようとする。い  
つしか秘裂はしつとりと潤いを帯び、乳輪に埋もれ  
た陥没乳頭もムクムクと勃起し始める。切れ長な赤  
瞳もトロンと目尻を下げ、視姦に酔った頬はほんの  
り桜色の陶酔を浮かべ始めた。

「いやとか言いながら、感じてるじゃねえか」

乳房を揉まれ、うなじを舐め回されながら囁かれ  
ると、ゾクゾクッと背筋が痺れて、理性の壁が水飴  
のように溶かされる。

「ンああ……ちがうわ……ハアハア……ンふう」

否定するように首を振るものの、真つ赤なルージュ  
に艶めく唇に、おねだりするような笑みまで浮か  
べていることに本人は気づいていない。

「突っ張りやがつて。そこが前回の可愛いところだ  
がな」

刃々牙の男はエリナの首をねじ曲げて、グミのよ  
うに熟れた唇を奪った。

「うう……っ……あうう……んん……むちゅう」

刃々牙への絶対服従を強要されているエリナにと  
つて、刃々牙の体液はすべて至高のご褒美なのであ  
る。抗おうと思うよりも先に舌が動いて、唾液を喉  
奥に送り込んでしまう。

「おいおい、キスつて……そこまでののかよ」

ショーとは思えないほど過激な演出に、カメラが  
一斉にフラッシュの閃光を瞬かせた。

「こっちもグチヨ濡れじゃねえか」

超ミニのボディコンをくぐり抜けた男の指がヴァ

ギナを弄り始めた。パイプも一段と振動を強め、蜜  
孔は壊れた蛇口のように止めどなく愛液を吐き出し  
続ける。夥しい痴蜜は今や太腿を伝い落ちて、ハイ  
ヒールまでも濡らし始めていた。

「すげえエリナ様、超エロいよ。たまんねえ」

「なによあれ、まるでAVじゃない」

（ああ……ちがう……ちがうのに……）

罵声と昂奮の声を同時に浴びせられて、脳内がス  
パークする。追い打ちをかけるようにパイプに子宮  
を突き上げられ、膝がガクガク震えだす。もはや自  
立することも困難で、倒れてしまえそう。

「もつと脚を開け。見せつけてやるのだ」

（そんなこと……させないでえ……）

自分を墮落させた殺したいほど憎い男の命令に逆  
らえず、エリナは腰を少し落としてガニ股に膝を開  
いていく。ピクピク震える大陰唇が捲れ返ると、ク  
チュンツという水音とともにサーモンピンクの花び  
らが妖しく開いていく。

「オオッ！ エリナ様のアソコ……み、見えた!?」

「パシャ！ パシャ！ パシャ！ パシャ！」

ここぞとばかりストロボが煌めき、エリナの脳内  
は爆発的な白光に包まれる。キュンツと収縮する蜜  
肉がパイプを食い千切らんばかりに締めつけて、濃  
厚な白濁愛液をドツと吐き出した。

「ンああ……だめ……い、イク……」

反り返る背中に極限の痙攣が走り抜ける。濃厚に  
唇を吸われながら、うっとりとう上気した美貌を反ら  
せ、破廉恥極まりないアクメを迎えてしまうエリナ

「はああ……」

弛緩した膣孔からパイプが抜け出て床に落ちて乾  
いた音を響かせた瞬間、照明が落とされ舞台は暗転  
した。

「うう……」

エリナが意識を取り戻したのは、ステージの上だ  
った。しかし雰囲気はがらりと変わり、客も完全に  
異形の刃々牙たちに入れ替わっている。エリナ自身  
の衣装もより過激なモノに着替えさせられていた。  
それは衣装と呼ぶのとはばかられるくらい小さな  
「布きれ」であり、身体のほとんどもは露出して  
いる。

「こ、これ以上なにをする気なの……」

「これから刃々牙の上得意様のために、裏ファッ  
ションショーを行うのです。これからが本番ですから  
もう一頑張りしてまいりますよ」

司会役のキザな男は斑目。エリナを改造したマッ  
ドドクターだ。

「まずは皆さんに本当の姿を観てもらいましょう」

酷薄な笑みを浮かべた斑目が筆を取り出した。  
「この筆はエリナの髪で創った特別なもの。今はバ  
ンヴォーラの操作端末の一つとして使えます」

エリナの肌に「発情妊婦」と書き加える。すると  
「う、うああ……い、いや……いやあ」

皮下脂肪が急速に増殖され乳房が見る見る大き  
くなり、元々Fカップはあった双乳が、一〇〇センチ  
を超える爆乳となる。お尻も二回りは大きく肥大化  
して太腿もムチムチに張り詰めていく。

「やめてえ……私の身体をいじらないでっ」

錯乱したように涙を流し、顔を振りたくるエリナ  
その間にも今度はお腹が見る見る膨らみ始めた。

「あ、ああ……胸もお尻も……お腹も……お、重い  
……うん」

絶望の吐息を上げるしかないエリナのお腹は、臨  
月の妊婦を遥かに超える大きさにまで膨らんで、立  
っていることもできなくなった。

「フハハハ。なんて無様なんでしょう！ 華麗なる  
退魔師、美の化身とまで言われた岬エリナが、まる  
で豚、潰れたヒキガエルですよ」

嘲りの言葉に場内がドツと沸く。刃々牙なら誰で



も最強クラスの筆狩師であったエリナに対して、邪な感情を持つているだろう。

「うああ……見ないで……私を見ないでっ」

ステージ上で四つん這いになったまま、氣丈に咆哮するエリナ。しかし抜群のスタイルを台無しにした今の姿では失笑を買えばかりだ。

「あれがパンヴォーラという生き人形か。妊娠までできるとは噂通り素晴らしいモノだな」

「あの伝説の美少女退魔師岬エリナが素材というところが実にそそりますな」

観客はいやらしい嗤いを浮かべながら、品定めするような眼でエリナをジロジロと觀賞する。

「ううっ……ああ……もう死にたい……」

妊娠ポテ腹姿を晒し者にされ、大粒の悔し涙が頬を伝い落ちる。それはエリナが女として退魔師として完全敗北した、これ以上ない証拠だった。

「フッフ。貴女の心の折れる音は何度聞いても心地よいですねえ。では、人形の宴を始めましょうか」

斑目が筆を使って「ラブドール」と書き加えた。

「！」

途端にエリナの身体は自由を奪われ、糸の切れた操り人形のように動かなくなった。肌の質感が柔らかな弾力を失い、エナメルのような人工的で硬質な輝きを放ちだす。永遠に老いることのない奴隷人形パンヴォーラに特有のシリコン肌の光沢だ。

身体が動かないッ。

全身がバイオチップの制御下に入ったのだらう。表情は無表情になり、瞳の色も意志のないガラス玉のような青色に変化していく。

「強制モードで一時的に精神を抑制しました。まずはこの状態でお楽しみください」

斑目の指示で刃々牙の男たちがステージに上がり、エリナの身体にロープを巻きつけていく。人形となった退魔少女はまったく抵抗せず、されるがままだ

った。

「僕のことを覚えておるか、岬エリナ」

M字開脚で吊り上げられたエリナの前に、禿げた初老の刃々牙が立つ。

「俺のことも忘れてないだろうな」

「ハイ、覚えております。ケイマ様、ゴイ様」

背後から若いチンピラ風の刃々牙が迫る。彼らがかつてエリナが叩き潰した魔薬組織の幹部だ。

触らないでっ。

スペースのシリコン肌を撫で回され、蜜壺をかき回されて、甘い吐息が漏れ始める。太い指をくわえ込んだ花園はしつとりと潤いを湧かせ始めた。その一方で眉根には時折小さな嫌悪の痙攣も走る。

「人形にされても心はまだ生きているのじやろう。ヒビヒ、お前の苦しみが手に取るようにわかるわい」

指に代えて逞しい剛直を腔穴にゆつくりと挿入するケイマ。絡みつく極上の弾力は、悔しさと快楽に悶えるようにヒクヒクと戦慄している。

「狂うことも死ぬこともできねえ、お前はこの先ずっと、永久に俺たち刃々牙の性処理道具、生きたダツチワイフなのさ」

尻タブをバシッとした後、ゴイも肛門に肉棒をズブリとねじ込む。

「アアア……ハイ。エリナは……刃々牙様のために造られた、ダツチワイフです……あうん……」

ちがう……私は……ニンゲン……

肉体は敏感に反応しながらも、表情は赤みを帯びた程度で、さほど変わらない。しかし表面上の無機質さとは裏腹に、シリコンボディの内面に封印された魂からエリナの悲哀と絶望が滲み出し、より一層パンヴォーラの妖しい美しさを際立たせるのだ。「そこらのラブドールとは比べモノにならない」「ハアハア……こいつはすげえ。生きた女以上だぜ」

ジュブッ……ズブッ……ジュブジュブジュブ

腰まで引き込まれそうな錯覚を覚えるほどの密着感に、男たちは歓喜の声を抑えきれなかった。

「私のオマンコとアヌスは、刃々牙様に悦んでいただくためのオナホールに改造されています……あはうん！ どうぞ存分にお楽しみください。はあうん」

冷静な口調と熱い喘ぎが混ざり合う、パンヴォーラならではの嬌声がステージに響く。それが最強の退魔師だったエリナを完全にコントロールしているという征服欲を刺激して、刃々牙たちの邪悪な欲望を最高に刺激するのだ。

「ククク、もっとサビビスしてあげなさい」

斑目が「SEX MACHINE」と書き加えた。

「ヒッ！」

ヴィイイイ……ン！ ヴィイイイ……ン！

「うお、なんだこれは？」「中が動いているぞ」

アヌスとヴァギナの内側の媚粘膜がオナホールとなつて、媚薬ローションをまき散らしながら高速で回転し、二本の男根を磨き上げていく。

腔も肛門も名器改造されており、快楽を生み出す無数の柔突起が形成されている。その気持ちよさは何百人と女を犯してきた男たちが思わず賞賛の声を上げるほどだ。

「ああ……エリナのお尻マンコ、悦んでいた……ハアハア……とても嬉しいです……ああん」

こんなこと言わせないで、こんなことさせないでえ……

逞しい魔根が抜き差しされるたび、エリナは背筋を反らせ、気持ちよさそうに身をくねらせた。そのたびに乳房が振り子のように激しく振れ、ポテ腹もタブタブと揺れる。噴き出す汗が滝のように流れ落ち、シリコンボディの光沢をさらに磨き上げていく。あひいっ。だめえ……すこすぎるう……

エリナ自身の快感も凄まじく、網膜の裏で七色の



ルシアを撃退したと思ったらエンジュの身体にまた一難!?

本誌192ページから天海先生へのインタビューも掲載中!

コミックス  
第1巻  
好評につき増刷出来!  
思春期なアダム  
I  
絶賛発売中!!



# 思春期なアダム

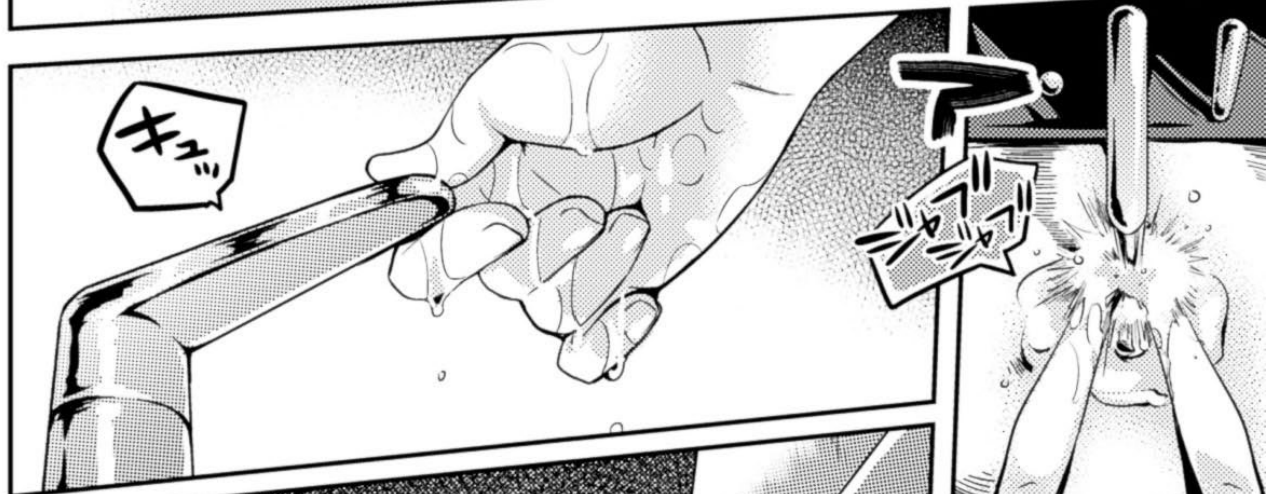
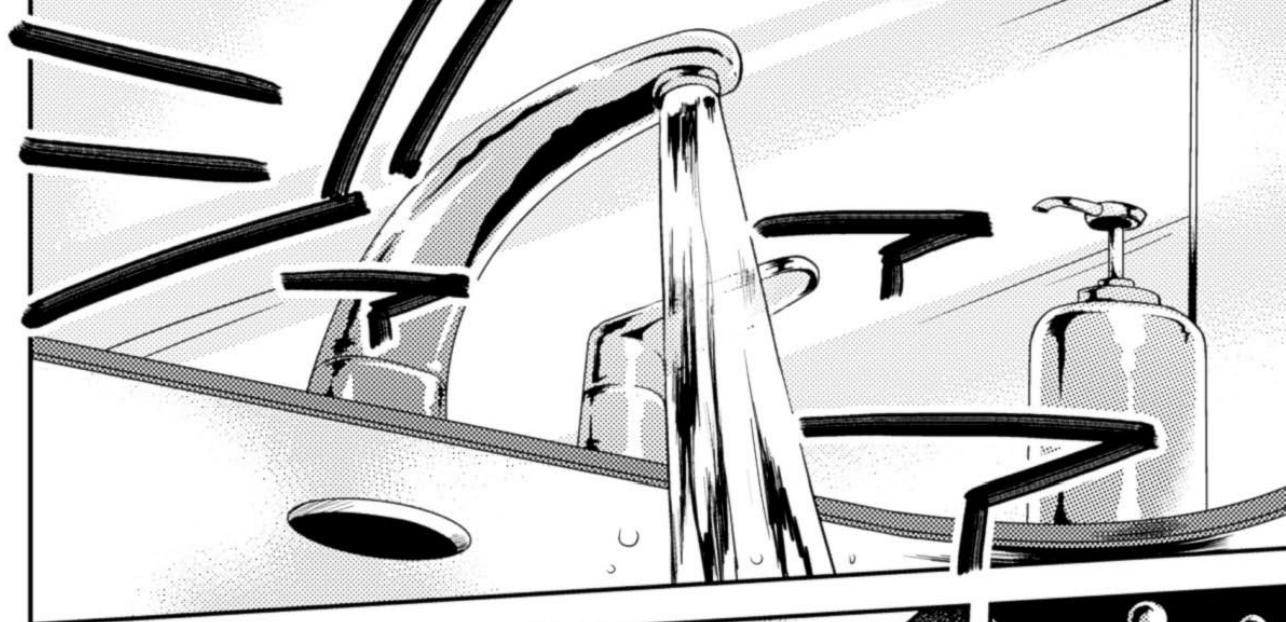
第9話

F U I L E Y E S

web 版コミックヴァルキリーでも連載中!  
<http://www.comic- Valkyrie.com/>

天海雪乃

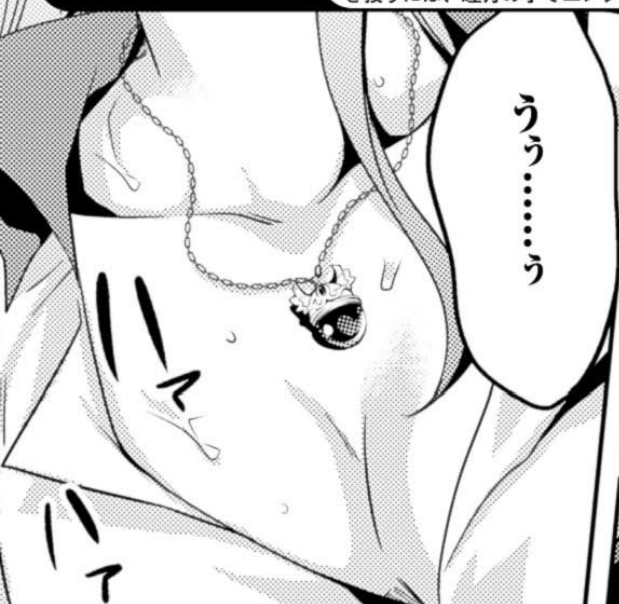
原作: かささき 傘





前号までのあらすじ

魔族少年ルシアを撃退したエンジュ。だがダメージによる発熱に苦しむことに。彼女を救うには、睦月の手でエンジュの素肌に治療オイルを塗りこまなくてはならず…。





……ふ……  
……は……

きれい……だな



一緒に暮らしてるし  
見慣れてもいるけど

こんなに近くで  
見るのは  
はじめてだ…

僕からこうして  
触れるのも…



ふにゅふにゅして  
柔らかい







どれだけ  
感染してるか  
わからないわ

パネイリの接触が  
あったところ全部に  
塗ってあげて

ごめん  
エンジュ…  
上だけとるよ

……うっ…  
むっ……きゅ…



うわわわわ  
ご…ごめん!  
これは…っ…  
そのっ……!



なんでアンタが  
素子<sup>ヒョウリン</sup>浄化してゐるわけ?  
ミカは?

その…ミカさん  
出かけてて  
代わりに僕が…

……そう



……香油……







ミカさんのもの  
そうだったけど  
天使のスーツって  
本当にすごいよね

あれだけ  
ビリビリに破れ  
ちゃってなのに  
ちゃんと元にな  
るんだ

ちよっ…と…  
うるさい…  
少し黙って…っ…

んう…  
ふっ…  
う…



ご…  
ごめん

しゃべって  
気を散らした  
んだけど…

ふっ…うっ…う

うしろから睦月の  
声がするだけで  
なんでこんなに  
……



感じてる…っ

蛇眼の力…  
発情がまだ  
続いているのかな

ひゃ…っ



……くすぐったいんだから急にはやめてよね

エンジンって敏感なんだ

やっ……  
なんか…ヘンな  
感じ……

オイルを  
塗られてる  
だけ…なのに…

そうだこども  
触られてたよね  
手えあげて

うるせ……  
……っ  
そこ……  
あんまり……

ふあ……



ひう... ひう... ひう...!

ふああん♥

そんなところ  
触られたら...  
もうっ...!

めろ

めろ



凛々しき  
巫女の二撃!!

次から次へと……!  
ようやく貴方で  
最後です!!

オ  
ノ  
レ

たっ

BLACK MERCHANT

触辱巫女美華沙

漫画 MAKI  
COMIC

瓢子ニ乗ルナ  
小娘ガアアア

ガッ

さあ止めて  
無へと還りなさい!







無事かな？  
お嬢さん



い今は  
何…？



油断は  
禁物じゃな…  
つかまりなさい



礼には及ばん  
だがこの程度で隙を  
見せるようでは…



ありがとう  
ございます…  
あなたは一体？



ワシが直接  
お前を捕らえる  
必要も無いだろう

!?

ニヤ…



それは  
どういう  
意味です！



耐魔の巫女  
折雛美華沙よ  
ワシと一緒に  
来てもらおうか

なぜ私の  
名前を…









ではさっそく  
仕込みに入ろうか

何これ？  
触手!?

きゃ  
きゅ  
きゅ  
きゅ





こんな事で  
私が屈する  
とでも…!

こいつは調教用の  
人造の魔物でね…  
コレに特化しておる

魔物!?

あうっ

いやあああ  
おっぱい…  
食べられてるっっ

更にこいつらは  
突起物を好む  
習性がある

やめてええっ!  
もう乳首  
吸わないでええええ!



そして突起物は…  
乳首だけでは  
ないだろう？

しっ！

だ駄目！

は、

そこはっ…！

カキ  
カキ  
カキ

クッ  
クッ  
クッ

ウ  
ウ  
ウ  
ウ  
ウ

乳を  
弄らただけで  
もうこの有様…

快楽には  
勝てぬようだな

そんなこと…  
うすうす

クク…  
絶頂が近いか？  
敗北を認めたら  
気持ちよく  
イカせてやるぞ



負けないっ  
負けたくないッ！  
このくらい…



続きはたっぷりと  
屋敷で行ってやろう

絶頂していきなり  
潮を噴くとは  
なかなかの感度だな  
巫女よ

おっ…



戦華たちの淫ら咲きに  
掻き乱される心

# 軍属麗奴のバキ

淫れ散る三戦華

第3話 手折れる戦華

小説  
NOVEL

たかおか ちから  
高岡智空

挿絵  
ILLUSTRATION

にしき  
からすま式式



## 登場人物紹介



### ツバキ=エンデュミア

黒髪的女兵士。冷静沈着な思考と類い稀なパワーウイングの操作術で、母国フィオーレの危機を数々救ってきた。



### サイネリア=バブシオン

ツバキとともに戦う軍人。実剣術の武器攻撃が得意。金髪縦ロールのお嬢さまで、敵に対しては高慢な態度も。



### リリィ=セシル

機械工学・薬学に関しては天才と言われた少女。開発機器の成果確認の名目で戦場に出る。子供体系。

**前号までのあらすじ** 三戦事として敵国ドリオを退けてきたツバキ、サイネリア、リリィの3人。あるときリリィが失踪し、その救出に向かうも、サイネリアまでが毒牙に。2人を救出するため、ツバキは叔父・ラディマスのいる上層部へと掛け合う。

「……どういふことですか、なぜ部隊を再編成し、二人を救出に向かわないのでですか！」  
「危険だからだ。現状ではそのデメリットを上回るメリットがない——そう、上層部が判断した」  
「馬鹿な……パワーウイングは私と彼女たちにしか扱えない、救出のメリットは十分でしょう！」  
「もちろんだ。しかしそれは……あくまで彼女らが、パイロットとして機能できるなら——だ」  
「——っ！」  
そう言われても、ツバキには言い返す材料はあった。だが、自分が一瞬でも言葉に詰まってしまったことで、それを口にはできなかった。  
（私はあの瞬間、心のどこかで恐れていた事実を直視してしまった……二人はもう、奴らの……薄汚いドリオの男どもの、毒牙を——）

——ハアッ、ハアッ、ハアッ……。息を切らせてツバキが駆けることは、ドリオの前線基地——その非常階段だった。本来なら地上への道、けれど彼女にとっては地下へ向かう道になる。（ビーコンの反応は、この奥だ……二人はそこにいる、私が助けなければ……必ず……）  
数日前の、叔父との会話が頭を過る。

あの日、リリィが監禁されている場所へ救出に向かい、敵はすべて退け、あとはサイネリアが助けただけという状況だった。だがそこへ、ドリオの援軍が現れたことに気づいたツバキは、サイネリアによる救出作業を円滑にするため、援軍を陽動し、現場から遠ざかる選択をしたのだ。

それが正しい判断だったとは、いまでも思っている。けれど結果として、それは誤りだった。

合流場所へいつまで経っても現れないサイネリアを探しに、再び向かったあの廃墟——そこには、朽ちた旧型のパワーアームが残されていただけ。無数の機械コードが伸びる歪なデザインで、それ以外の手掛かりはまるでない。確かに反応があったリリィもサイネリアも、そこから姿を消していたのだ。

（考えるまでもなく、忌まわしい事態が起こったことは明白だ。だが……だからこそ私は、二人がすでに、兵としての誇りを失っていたとしても、助けなければならぬ！ どんな手を使ってもな……）  
軍から無断でパワーウイングを持ちだし、命令も軍規も無視して単独での調査に入った。彼女らの居場所を見つけるため、安くない金をばら撒き、あらゆるツテを利用してドリオの国境を越えた。

無線は無視し、通信機も粉砕して、非合法な振舞いも犯している。酔ったドリオ兵を拉致し、拷問にかけ、情報を手に入れた。その甲斐あってツバキはいま、二人が囚われている基地内を駆けている。

（万が一のため、三人でドッグタグに仕込んでおいた発信機……それが、こんな形で役立つとはな）  
それはあまりに電波が弱く、かなり近くまで寄りなれば受信機に反応はない。お守り程度の意味で持ち合っていたのだが、その微弱な電波のおかげで彼女らがここにいることを確信できている。

非常用の螺旋階段は、かなり地下深くまで続いているようだった。すでに十階層分ほどは下っただろ

うか、次第に地上の音が遠のき、辺りの空気が冷気を帯びてゆく。そしてついに、階段の最下部が見えた。先には扉がある、けれどツバキはその手前に見えた通気口に目をつけ、封鎖しているカバーを慎重に外す。こちらの侵入が気づかれていないにしても、いないにしても、極力音は立てずにいきたい。

（さて、反応は……）

地下深くとはいえ、多くの部屋があるのだろう。ダクトは枝分かれし、入り組んでいる。受信機を頼りに、ツバキは反応が強くなる方へ進んでゆく。

強くなったり弱くなったり、ターニングできない狭い中を匍匐のまゝ行ったり来たりを繰り返し、やがてツバキは一つの部屋へ辿り着いた。

◇

その部屋はまるで、医療室のようだった。

器具のついた椅子が複数あり、ベッドも教台が並んでおり、空間は広々としている。だがその一方で、壁には拘束用と思われる錠やベルトが備えられ、床には雑多に器具が散らばっていた。

また、いくつかの机や棚にはアンブルや注射器、浣腸用の道具が置かれている。それはそれで医療用に見えなくもない。だが滴る薬品の色や、それ以外の道具のせいで、それらが非常にインモラルなアイテムの類にしか思えなかった。

いや、実際にそれは、インモラルなアイテムなのだろう。その証拠に室内では、目を覆いたくなるような淫虐の宴が行われているのだから。

「ああうううっ、んふっ、ふむううっ！」

まず、振り返ったベッドのような台に張りつけられた金髪の美女が、二人の男に胸と口を犯され、全身を跳ねさせ身悶えていた。美女は穴の開いた口枷と目隠しをつけられ、上を向いた状態で寝転んでいる。両手は背中から台を抱くように固定され、脚も大股開きで台の脚に縛りつけられていた。

腹に乗った男が美女の巨乳を味わいつくし、頭側に立つ男は、喉を串刺しにするように唇を犯している。苦悶の声と表情を晒しながらも、美女は抵抗することもできず、男たちの獣欲に塗れていた。

仰向けになって自重に潰れながらも、大きさと形の美しさはまるで崩れていない、剥きだしのいやらしい乳房。身体がコルセットのようなボンデージのような、赤いラバーで包まれ、彼女が身悶えるたびにギチギチと締めつけるような音が響く。

「ふえあああ……あうぶつ、ふぐううつ……」

その隣では、椅子に座るようにして、小柄な少女が縛りつけられていた。眼鏡をかけた顔は、そのレズや蔓にまで白濁の汚液がこびりついている。

そう、少女は座った状態で唇を犯され、顔中が性欲で汚されていた。ほかの部分は露出もしてないければ、恥ずかしい姿をさせられているわけでもない。だが抵抗できずに座り犯されている、その状況で着慣れた軍服に身を包んでいるのは、彼女にとって最大の屈辱だ。そして犯す男たちにとっては、なによりの嗜虐のスパイスとなる。

「んぐぶつつ、おぐうつ、んおおおつ……」

昂った男たちが腰を叩きつけ、少女は喉奥まで肉棒に挟まれ、嘔吐かされる。けれど敏感な唇は熱い滾りに触れると、甘い感覚を生んで下腹部に熱を広げ、堪えようのない快感を覚えてしまうのだ。

（はっ、ひゅつつ……こほっ、こおん、らああ……んちゅ、じゅるううう……あ、あはまあ……ひかひか、ひゅる……ひびれ、ひやううう……）

口内に含んだ肉棒が激しく脈打ち、膨らんで、性欲の破裂を感じさせる。そうすると自然に舌腹が広がり、剛直の裏筋にベットリと張りついて、尿道からの進りを待ち侘びていた。熱さに舌が疼き、股間が潤んでどうしようもない。気がつくとも太もももニーソックスを穿いた脚も、穿いたスカートを下敷

きにする桃尻も、すべてが己のもらしだした愛液でグチョグチョになり、卑猥な匂いが漂っていた。

——ピュルッ、ピュルッ、ピクンッ！

やがて男が達し、おぞましいほど大量の精液が吐きだされ、口内を侵略してゆく。口に広がる苦味のある青臭い味、そして鼻腔に込み上げる、こびりつくような生臭さ。すべてが不快でたまらないのに、身体は心と裏腹に、感極まった反応を見せる。

「んはああつ、ふあぐつ、ふああああ……」

男の指に舌を摘まれ、引っぱりだされたその上に、扱きだされた精液をプチ撒けられる。舌が灼けるような熱さに包まれ、苦味に——そして狂おしいほどの快感に、ジンと痺れさせられていた。精液の味に下腹部は先ほど以上に熱く火照り、オシッコをもらしたかと錯覚するほどに牝汁がもれてゆく。穿かされたショーツの奥で秘唇は大口を開いて緩みきり、湿った布地にその卑猥な形を浮かび上がらせ、パクパクと下着を咀嚼するようにヒクついていた。

◇

「なっ……ぐつつ、くううつつ！」

意味としては理解していた、だが認識は甘すぎた。女性がドリオに囚われるということ、その現実を目にして、思考は完全に凍りつく。それは想像を絶する人としての尊厳さえ打ち砕く行為だった。

（これ、が……女としての、屈辱だ……辱めだと、いうのか……これが、ドリオオツ……）

通気口の隙間から覗き込んだ室内、その淫惨な光景に凄まじい怒気が込み上げる。歯軋りの隙間に唇を食い、食い千切れた粘膜から血の筋が流れた。

（サイネリアっ……リリイっ……くつつ……そおおつつ……！）

目の前の壊れやすそうなフィルターを殴りそうになるが、そんなことをしても室内の男たちに見つかるだけだ。荒い呼吸を無理やり押し殺し、感情を鎮

め、またはも匍匐のまま移動を再開する。目指すのはいまの隙間からチャリと見えた、部屋の天井の上側大きな換気扇のついたスペースだ。そこから換気扇とカバーを同時に破壊し、一気に室内へ踏み込む。

男たちさえ始末できれば、二人の身柄は確保できるだろうけれど、破壊と侵入は速やかかつ穏便に行わなければならない。最低限の爆破装置を目標の四隅に取りつけ、ツバキは僅かに呼吸を止めた。

（4、3、2……いまだっ！）

装置のスイッチを押し込み、小さな破裂音とともに天井からの侵入ルートが開く。周りには聞こえないまでも、室内にいる男たちにははつきりと届いたはずだ。驚いた顔が天井を見上げる、そこに飛び降りたツバキはブーツを履いた脚を叩きつけ、頭蓋を割らんばかりの勢いで渾身の蹴りを見舞った。

「はあああああつ！ ふつつ……やああつ！」

半裸の大男が巨体を揺らし、たたらを踏む。それを横目に着地すると、今度は身体を捻って折り曲げた脚を伸ばし、遠心力を乗せた蹴り上げを別の男に叩き込んだ。不意を打たれた相手はあごをはね上げられ、白濁した唾を吐いて悶絶する。少し離れた男はさすがに反応が間に合ったか、腰に帯びた短銃を抜いてツバキに狙いを定めた。

けれど、蹴り上げはそもそも、銃を抜くための予備動作に過ぎなかった。とうの昔にサイレンサー銃を構えていたツバキの冷静な、そして冷酷な切れ長の瞳が男を見据え、指は容易く引き金を引く。

——パスンッ、パスンッ！ ドオツ……

空気の抜けるような音が響き、銃を構えた男が血溜まりの中へ倒れ込んだ。続けざまに二発ずつ、蹴りを見舞った男たちへも銃弾を撃ち込み、瞳を閉じた黒髪の戦華は、ゆつくりと重い息を吐きだす。改めて目を開き、二人の姿を確認する。生きていてくれた安堵、惨状の悲痛さ、感情が胸に渦巻くも



顔にはださず、劣るように声をだした。

「……サイネリア、リリイ……待たせて、すまなかつた……すぐに帰ろう、我々のフィオーレへ」

彼女らの身体を拘束する鎖、そして手錠、そういった拘束具へ銃弾を放ち、ぐつたりとする二人を介抱するように助け起こす。

「二人とも、わかるか？ 私だ、ツバキ！ エンデューミアだ……聞こえていたら返事をしてくれっ」

ニチャリ……と気色の悪い粘液の感触が、軍服スーツの上から肌に染み込んでくる。だが、それに塗れさせられた彼女らは、自分以上に不快な思いを何日も味わってきたのだ。それに比べればこの程度、毛ほども感じないと、彼女らを抱き支える。

「しつかりしろ、助けに来たんだっ……」

サイネリアのほうは意識こそあるものの、目隠しのせいで状況が把握できていないようだった。それを外してやると、突然の光に眩んだ瞳をギョッと瞑って、背けるように顔を傾ける。

（意識はあるか、安心したぞ……）

スーツの袖で、汚れた顔を軽く拭いてやると、幾分か不快さの紛れたらしい彼女は、しかめた顔を元に戻し、落ち着いた呼吸を取り戻していた。

そうして今度は、リリイのほうを揺すり起こす頬を叩いて刺激を与えると、焦点の合わない瞳がやがて色を宿し、意識を持ってこちらを見上げた。

「う……ッ、バキ……？ んっ……」

言葉を発した瞬間、ビクッと彼女が身を竦めて腰を震わせる。そんなリリイの言葉を聞いて、サイネリアもようやく存在に気がついたか、ツバキのほうを向く。信じられないというように目を丸くし、けれどすぐに瞳を細めると、やがて弱々しく震えた声で、訴えるように呟いた。

「リリイは、しゃべらないほうがいいですわ……それより、ツバキ……どうして、来ましたのっ……お

願いですから、逃げてっ……」

「なにを馬鹿な！ 私は助けにきたんだ、さあ帰ろう二人とも……立てるか？」

ぐつたりと床に崩れている二人の腕を取り、立たせようとする。けれど――。

「……？ どうした、まだ辛いのか？ だがゆつくりしている暇はない、無理をしてもいい、私がサポートはするから――」

立ち上がろうとしない彼女らに、そう問いかける。その問いにサイネリアは、寂しく微笑み返した。

「……ふふ、そういう問題ではありませんの」「どういう――っ……サイネリア、お前……」

瞳を細めて彼女を観察し、そして気がついた。取った彼女の腕を離すと、それはダラリと垂れ落ちてしまう。だが肩から先はフルフルと小さく震えているのだ。それでわかった、上げようとしても、伸ばそうとしても決して動かせないほどに、何らかの手段で筋力が弱められているということが。

「筋弛緩剤の類か……ぐっ……それなら私が背負ってやるさ、二人ともだ！ さあ早くっ……」

二人の腋に腕を通し、肩を担いで両肩に背負おうとする。だが無理だ、軽量のリリイ一人ならともかく、長身のサイネリアまで担いで機体の下まで向かうことなど到底不可能。立ち上がり、数歩を歩くことはできたが、自らの支えがない荷物のような人体は、体重以上の重さを感じさせ、肩にのしかかっていた。機体までどころか、この基地を脱出することさえ危うい――そんな考えをグッと噛み殺す。

「ふっ、軽いものだな……戻ったら再訓練だ、まずは筋力を戻さないと……っ……」

「……ふふ、優しいのね、ツバキ……ただどわかつたはずですよ。お願い、わたくしたちのことは、もう放っておいて……」

「なにを……」

サイネリアの力ない声が耳を掠める。ツバキは思わず瞳をつり上げ、彼女を振り返らずにはいられなかった。だが――。

「あなたまで帰れなくなつては、誰がドリオの悪行を止めますの！ 状況を見極めなさい！」

「……っ！」

筋力のない身体に鞭打って、懸命に悲痛な叫びを響かせられ、ツバキはようやく、現実を目の当たりにする。薬で動けぬ身体をさらに拘束し、弄び汚し抜いた男どもの猥欲を思うと、腸が煮え滾った。

（絶対に許さん……私の親友たちを、よくも……よくも、こんな姿に……くっ……）

二人を床に座らせ、友愛の証に頬へ口づけようとする。けれどリリイも、そしてサイネリアも動けぬながら顔を背け、それを拒もうとしていた。

「なぜだ……私は必ず戻ってくる、だから……それまでの、しばしの別れくらいっ……」

「おバカ、察しなさいな……っ……」

大きな瞳が歪み、ツウ――と一滴の涙が頬を伝う。リリイも眼鏡の奥に涙を溢れさせ、その顔をグシャグシャにしていた。

「こん、ら……よ、よ……れた、顔に……わたしに、キス、なんてっ……し、ない、れっ……」

「……っ……」

胸が引き裂かれる、心が穿たれる。慟哭の叫びを響かせたくなるほど、耐えがたいほどの悲しみが込み上げていた。だが、彼女らがそう思っていたとしても、そして自分とここで別れるのだとしても、自分がそう思っていないことだけは伝えなければ。

「バカは、どっちだ……お前たちは、汚れてなどいない！ たとえ身体をいくら蹂躪されても、心が怯えたとしても……リリイも、サイネリアも……私の親友だ！ 身も心も、華のように美しい！」

その言葉をどう受け止めたのか、表情を失った彼

女らはやがて、諦観<sup>ていかん</sup>の笑みを小さく浮かべた。

「まったく、わからず屋ですこと……」

「私は素直なほうだ」

口づける、その鼻先に牡の異臭が突き抜けた。不快感を怒りに変換し、二人に別れを告げたツバキは立ち上がる。

「また会おう、二人とも……無事でいろよ」

天井に戻ることはできない、誰かが来る前に素早く、そして慎重に扉から出るしかないだろう。だがそう判断して動きだすには、ツバキはこの部屋に長居しすぎたようだった。

「麗しい友情だなあ、戦華たちよ」

「つつ！ き、さまつ……トスカータアツ！」

開かれた両開きの扉の前、マントを羽織った巨軀が佇む。赤毛の髭面、そして隻眼、傷だらけながら筋骨隆々とした逞しい肉体、紛れもなく以前に相対したドリオの王、トスカータの姿だった。

（相変わらず、兵たちと違って隙がない……そして、凄まじい威圧感だ——）

戦場でもそうだった、触れずともわかる。硬い鋼のような肉体は、見る者を圧倒していた。すぐさま腰の銃を構え、ツバキは油断なく視線を這わせる。（まずいな……だが、言い換えればチャンスということ……）

王の左右には、完全武装の兵が二人立っていた。見ればトスカータのほうは軽装で、短銃一つ装備していないように見える。つまりこの護衛さえいなければ、敵王を暗殺、あるいは人質にして、親友を助けられるかもしれない。

（いや——冷静になれ、そもそこの男が、どうして前線基地にいる……私を待っていたからではないのか？ 罠を張り待ち伏せ、そこに私が飛び込んだのだとしたら……無理をしてはならない）

少し前までのツバキであれば、最初の考えを採用

し、二人を排除したうえで王を対処したことだろう。だがいまは違う、仲間に己の役割を思いださせられた。それを果たすまで、無謀はできない。

「ふふっ、お前の考えは手に取るようにわかるぞ、ツバキ……そうだ、お前が助かるには俺を捕らえるか……俺の背後だ」

親指を立て、背後のドアを差して告げる。

「ここを抜けるしかない。天井に行くなら構わんが、すでに出口は封鎖されている——という可能性くらいは考慮すべきだろうな」

（つ……惑わされるな、耳障りな言葉を聞く必要はない。最良の選択肢を取れ——）

覚悟を決める、そして一呼吸——刹那。

「はああ……ふつつ!!」

引き金を引き、二発の銃弾を左右にほぼ時間差なく叩き込む。あくまで威嚇、当たればよし、当たらずとも問題はない。空気の抜けるような音を耳にし、兵たちは音への反応を示す。一人は王の前に立ち、もう一人は体勢を変えながら銃を構え、ツバキに照準を合わせようとした。

それを見届け、ツバキは床を蹴って傍の椅子を踏む。そしてさらに高く、今度は棚だ。そこからライトを掴み、反動をつけて天井の穴へ向かった。

「つつ……逃がすか!」

（単純な……予想しなかったことをされ、すぐに動揺を見せるとは……親衛隊でこのレベルか）

ツバキに与えられた三択で、最もあり得ないのが天井への脱出だ。ダクトは狭く、出口が制限されガス兵器には限りなく弱い。そこへ逃げ込むのは袋の中のネズミになるのと、同じことである。

だからこそ——そこに勝機が見いだせた。まさか、戦華と持て囃されるツバキが、それを退路に選ぶとは思わなかったのだろう。予想外の動きに慌てた兵がこちらへ銃口を向けると同時に、ツバキ

は袖に仕込んだ杭のようなナイフを投げる。

「なつつ……おぐうっ!」

痛みと弛緩にバランスを崩す、その巨軀の急所へ冷静に銃弾を撃ち込んだ。そのまま天井から床に降り立つと、倒れる男を盾に、銃撃で牽制する。

（一人、そして——）

その陰から赤毛の王を睨むと、目が合った。どうせ逃げ切れまい——貴様などに捕らえられるか——そんな会話を視線でかわし、ツバキは床を蹴って身を低く跳ねさせ、室内を広く迂回する。

護衛が一人になった以上、兵の優先順位は王の命、そしてツバキの身柄だ。こちらへのチェックが甘くなれば、重装備の巨漢に動きで劣りはしない。

（もらった——）

開きつばなしの扉に回り込み、威嚇の銃弾をばら撒きながら、廊下へダッシュする。敵の気配は感じない、そうでなくてはそちらへ脱出など考えなかっただろう。だからこそなんの躊躇もなく、ツバキは扉から廊下へ身を躍らせた——その瞬間。

「はつつ……ふつつ?! いぎあああああつつ?!」

絹を裂くような悲鳴を上げ、ツバキは地面を駆け回らされる。四肢が動かない、そしてパニックに陥った頭が、事態へ対応できずにフリーズする。

（なんだっ、なにが起こったっ?! 腕は、身体は、どうなった……あぐつ、う、ああ……）

そして、直後——。

「いつ、あつ……いづつ、ふぐううつつ……」

襲いくる痛み、全身が引き裂かれるようだった。言葉も思考も、呼吸さえも止められて悶え、叫び、激しく地面をのたうち回る。その視線の先で、ゴッソツと男の足とブーツが、床を踏み鳴らした。

「他愛ないな、ツバキよ。我が国で独自に開発を進めてきた、電磁シャッターの味はいいかな」

「ふうぐつ、うううう……き、ひやまあ……」



呂律が回らないほどに筋肉が弛緩している、強烈な電気刺激の影響だ。解除しなければ、通る人間に凄まじい電気ショックを浴びせる——扉に仕込まれたそんな装置が起動したのだが、いまのツバキには考えることができない。華ではなく、華に群がるチヨウのように、ツバキは張り巡らされた電磁の網で、四肢も思考も見事に搦め捕られていた。動けない身体、目の前には敵王とその親衛隊、そして——。

(なん、て……ことだ、こんな……ぐっ……)

「ご無事ですか、陛下!」「ごつちだ、急げ!」

駆けつける兵たちの足音、声を耳にし、目の前が真っ暗になるという心境を味わわされていた。

「ようこそドリオへ。我らのやり方でなければ——存分に歓迎しよう、フィオーレの戦華よ!」

「じ、くへ……お、ひろ……」

そんな戦華の、精いっぱい抵抗を見せる言葉は鼻先で笑い飛ばされ、首筋には注射器の針を宛てがわれ——ツバキは意識までも、真っ暗に染められた。

◇

(……よく言えば絶望的、悪く言えばおしまいというやつか、これは……)

目が覚めたツバキが最初に感じたことは、その窮屈さだった。そして次に体勢の不安定さと息苦しさ、血が頭に上る不快さに気がつく。

目を開くとそこには、逆さに立つ複数の男たちがいた。数は五、六……その部屋の入口のほうには、さらに大勢の男が控えているようだった。先頭に立つのはやはりあの男、トスカータである。

「動けぬ女がそんなに怖いのか」

感覚で、手首と足首、そして腰や背中が、しっかりと拘束されていることはわかった。手は万歳のように伸ばし、頭の上方で床に固定されている。後転の途中のように、お尻を上に向けた体勢で、足首も手の近くで床に繋がれていた。それだけの拘束を受

けながらも、ツバキは気丈に笑みを浮かべる。

「ドリオの男は、腰抜けじゃないと見えるな」

「ふへへっ、聞いたかよ、いまの」「やつばフィオーレの女は気位が高えなあ!」「あの爆乳金髪と同じような態度だぜ、いつまで保つのかねえ!」

一切の抵抗を封じられた格好で、まるで怯えもせず言い放ったのがよほどおかしかったのか、男どもは一斉にゲタゲタと笑い立てた。

「ふっ……こちらのほうが大笑いだな。貴様らに比べれば、まだ子供のほうが恐ろしい。彼らは貴様らと違い、非常に勇敢で怖いもの知らずだ」

「ぎやーっははは、だるうなあ!」「おー、こええ、こええ」「ジョンベンちびつちまいそうだぜ!」

いくら挑発しても、彼らが乗ってくることはない。己の圧倒的有利を理解しているらしく、やがて王が止めるまで、彼らの嫌な笑いは響き続けた。

「ふふっ、兵たちが笑うのも無理はない。あの戦華が、これほど容易く手に入ったのだからなあ……とはいえ、至高の宝には違いない。俺自ら、しっかりと愛で——手折ってやらねばなるまいよ」

そう言つてニヤリと笑つた王が、近くにいた男に視線で指示を飛ばす。すぐさま動いた男たちが、強化素材の軍服に、レーザーナイフを這わせた。

「つつ……くっ、ううう……」

ギリッと齒軋りし、痛みに耐えようとする。けれど男たちはこういつた作業に慣れているのか、ツバキの真っ白な肌には傷一つ残さずナイフを滑らせ、瞬く間に下半身を素肌まで剥き上げた。

「ぐははははは、実にいい格好だな、ツバキよ!」

「つつ——黙れつつ、このゲスがつつ!」

その初心さと実直さゆえに、思わず頬を赤く染めて、ツバキは感情を露わに叫んでしまう。

(……だめだ、冷静に——覚悟をしろ、揺らぐなっ……二人のように、耐え忍べっ……)

そう思い直し、慌てて口を噤むが、疑いようもなく生娘だとわかる叫びを聞いて、男たちはニヤニヤと下卑た笑いを浮かべた。

「そう怒るなっ、ツバキちゃんよお!」「そうそう、せっかくのムチムチ太ももが台無しだぜえ!」「プリップリのエロ尻もなあ!」「穿いてた下着は、こんな可愛いんだからよおつ、ぎやはははは!」

汗に塗れた純白の下着を振り回され、匂いを嗅がれる。これまで味わったことのない牝辱に、母親譲りの白肌がカアアツと赤く染まってゆく。

(う、狼狽えるな、ツバキ! エンデュミア……奴らの下劣な趣味に、反応してやることはないっ……)

スカートやストッキングを切り裂かれ、下着を剥かれた肌が、男どものいやらしい視線に晒されているのを感じ、懸命にそう言い聞かせた。けれど太ももの半ばからお尻までを冷やかな空気に触れられては、どうしてもその状況を意識してしまう。

大股開きでの屈辱姿勢によって、女性として、人として他人に晒すことなどあり得ない——尻房の谷間までが、完全に剥きだしとなっていることは、はっきりとわかっていった。男たちの視線がその一点から周囲のポリウムある柔肉へ、そして太ももへと移り、何度も往復しているのを感じる。

(くっ、ふううっ……あああ、見る、なあっ!)

屈辱のあまりに筋肉が震え、それが意識もしていない、恥ずかしい反応を示させていた。引つ張られた脚の影響で横伸びになった菊皺が、先ほどからヒククツとわなないで、不淨の肉穴を跳ねさせる。

「ふははは、戦華と言えただだの女か……その反応、これまでに恥めた女どもとまるで変わらんぞ」

「き、貴様が……ふんっ……貴様らなど、男とさえ思ってもいい。いくら見られようと、虫に見られるよりもどうということはない」

吐き捨てるように言い繕いながら、逆さになった

視点で憎き男を睨みつける。

「——リリイとサイネリアはどこだ」

「さあてな、あいつらもまだまだ調教途中だ……貴様もおとなしくしていれば、立派な奴隷となった頃に会えるかもしれんぞ？」

「ほざけっ……んくっ、ぐっ……」

ゴツゴツとした手が肌に触れ、ねちっこい手つきで揉みしだくように、太ももを撫で回した。汗ばんだ肌は男の手に吸い寄せられながら柔軟にたわみ、えも言われぬおぞましい感覚を告げてくる。嫌な刺激が肌を駆け、むず痒さが脚の付け根に響く。

「反応はありきたりだが、やはり身体は素晴らしいものだ。これだけ鍛えられた身でありながら、美しさも兼ね備えている、優れた奴隷の素材だ」

「っ……貴様のごとき輩が触れるには、過ぎたものだろう？ 今生の名残に、愉しんでおけっ……」

鋭いツバキの言葉を豪快に笑い飛ばしたトスカータが、濃紫色のボトルを取りだし、口を開いた。

「ぐははははっ！ それでこそツバキだ、そうではなくては、わざわざ戦華を捕らえた意味がない。さて……その態度がいつまで保つか、見ものだ」

「安心しろ、貴様らに媚びへつらうことなど、絶対にあり得——んくふっっ！」

不意に、不浄の蕾からその周囲、そして恥裂に浴びせられる冷たい感触に、思わず頓狂な悲鳴をもらしてしまふ。威勢のいい言葉の直後、間拔けな声を響かせた戦華の姿に、こらえきれない笑いが男たちから上がっていた。

「ぶっふ！ 聞いたかよ、いまの……」  
「媚びへつらうことなど——ああんっ♪ だとよお！」  
「言ってるそばから可愛い声だしてんじやねーつての！」  
「~~~~~っつっ!! ふぐうっ……」

恥辱に震えながら歯を噛み締め、懸命に唇を引き締める。そうしている間にも、トスカータが塗布し

ているであろう冷たく、そして纏わりつくような粘っこい感触は、瞬く間に局部を埋めつくす。

雪の中にボツンと咲いた桃花のような、白肌を窪ませる淡桃の菊皺粘膜が、塗りたくられる粘液に覆われ、変わらぬヒクつくたびにニチャニチャと音が響く。不浄の窄まりを男の指で、凝視されながら突かれ、擦られ、弄り回されている——女として考えられない恥辱が怒涛のように全身を包み、頭の奥をカアアツと熱く沸騰させていた。

（っ……堪えろ、顔にだすなっ……こんな奴らに女として接する必要などない……二人が数日を重ねて味わった苦痛を思えば、この程度——）

「なんだこのケツ穴は、貴様はここで呼吸しているのか？ 先ほどから物欲しそうにヒクつかせおって、俺の指でもしゃぶりたいか？」

ツバキの指二本分はある、太い指が僅かに肉皺を挟み、菊壺の入口を掻き混ぜる。排泄の感覚を思わせる、本能を揺さぶるような甘い快楽を一瞬だけ覚えるも、すぐさま敵王による淫辱だと思ひ改め、ギリツツと歯を軋ませて視線を尖らせた。

「くくっ、いい顔だぞ……そしていい尻肉だな。少し触れただけで、指に吸いつこうとする……これは素晴らしい名器になるぞ。まずはその手入れを始めてやるとしよう、ふはははっ！」

「黙れっつ！ それ以上くだらぬことを吹聴するつもりなら、その口を拳で塞いでやるっつ！」

だが——威勢よく吠えても、脚を振り上げようとしても固定された位置からはまるで、ほんの少しでさえ動かすことができない。ギシッ、ギチッと拘束具の軋む音を聞いて、ツバキの抵抗を察した男たちが、そして赤毛の王が唸るような笑いを響かせる。

「ふむ、俺の口を塞ぎはせんようだ、結構なことだな……さて。そろそろ頃合いか」

言いながら、男の指が尻谷間をなぞり、粘液に浸されしつとりとまとまった恥毛——髪と同じく漆黒で、下品に丸まった陰毛を捌め捕ってゆく。

「ふははははっ！ 見事な剛毛で肛門を守っているようだなあ、さすがは歴戦の女兵士よ。だが、毛の濃い女は俺も嫌いだ、ぐははははは！」

「——変態がっ、蛮族の王に相応しい恥癖だな」

まるで処理を施していない、生え放題の恥毛を指摘された羞恥に、カアアツと赤面させられる。排泄用の穴を舐め回すように見られ、弄られ、晒されているというのに、女としての無精を責める言葉は、それまで以上の恥辱となつて心を揺らした。

（っ……冷静になれ、私は誇り高きフィオーレの兵士だっ……女など、捨てているっ……）

そう思いたいのには、理性と心は受け入れてくれない。戦華として各地を慰問したり、マスコミへの広告塔としての軍令も帯びたその身は、通常の女兵士よりも遥かに、女としての意識を身体中に刻み込んでいた。薄着のこともあるため、腋や脛へのムダ毛処理は欠かさない、けれど異性と床を共にするわけではないのだから、局部への手入れはかなりルーズに対応している。するとしても、デルタゾーンを簡単に整える程度で、自分で確認することも難しい尻谷間のほうなど、完全にノーマークだった。

体型の維持は訓練でどうとでもなった、肌の手入れもサイネリアの指導の下、それなりに上手くこなしていたと思う。兵士でありながら女の魅力を伸ばす、いわば二足の草鞋を履いていた戦華だからこそ、その部分を責める行動、言葉はなにより弱点だった。とはいえ、それを見せることなどできない。

「だが奴隷としては不合格だ、女の嗜みを教えてやるべし。姫君や令嬢の奴隷であれば、あえて伸び放題にさせるのも乙なものだがな」

「好きにしろっ……その程度の恥辱で、私の心を手



さあ各々の  
時代へ戻れ！

我の与えた力で  
歴史を弄べ  
魔術師ども！

おおせの  
ままに！

ハイル…！

ダー！

お前らは今  
本物の魔術師と  
なったのだからな！

クク…

行ったか  
おろか者どもめ

人間ごときが  
本物の魔術を  
扱えるワケが  
ねーだろーがよ  
…？

久しいですな  
エデンの園の  
管理人どの！

はるか  
一万年の  
時間を越えて

疑問に答えて

頂きたく

参上した次第！

神が悪魔が、歴史を裏から操る者たち！

漫画  
COMIC

エデンの  
魔園  
おおたたけし

…！  
お前は  
サンジェルマン  
か？

人の分際で  
時を越えるとは  
スゲーな！

どういう  
事だ！？

「エクリマルク」  
この自動人形こそ  
我が最高傑作の一つ

110  
4  
7

時を翔ぶ  
完全なる  
人工聖母  
なれば!

へええ

さすけた魔力に  
おこらず  
錬金科学を極めたか

やる  
お前の  
ほころびは  
どうなった?

魔女狩り  
戦争  
邪悪な奇跡

貴方が私たちに  
与えたほころびは  
歴史のそこそこで  
狂気と争いの種を  
産み出した

何だ何だ

人間のクセに  
オレに何か尋ねるとか  
億年早えよ

いいからお前らは  
オレに従って  
ほころびにガンガン  
命を捧げて増幅  
してりやいんだつつの

……あ?

ああ!?

テメエ

何勝手な事  
してんだ!?

魔力くれてやったオレを  
裏切んのかこのクソが!!

人類を破滅から  
救う為とお聞きした  
はずだが

なぜ我々を騙して  
人の歴史に死を  
まき散らした!

その期待には  
そえないな

各時代のほころびも  
回収させて  
頂いたよ!

マスター  
さがって下さい!

この者は  
人類の罪を創り出した  
男です!



ダメだなあ

ダメダメ  
だあ！

機械が  
相手だと？

オしは  
神直々の息子  
だつーのよ！！

おお  
と！

なるほど……  
中に「ほころび」が  
そっくりいるのか

なるほど  
一万年も翔ぶとなると  
「ほころび」の魔力なしには  
キツイもんな

マスター……

そこで  
おとなしく  
してな  
お前の小賢しい  
発明品から「ほころび」を  
取り出してやっからよ







**精液奴隸に墮ちる！**

グラマトンを攻めるバーンドベルグに  
現れたのは囚われたイセリアの女王！  
かつては凛々しかったアリオナは、  
墮落した熟れ媚肉で憎き皇帝へ奉仕し、

# イセリア 英雄戦記

the legend of the Aeepa war

第30話 落日の狂艶

オバキュー

小説  
NOVEL

089 夕ロー

ぼたん

挿絵  
ILLUSTRATION

牡丹



「報告いたします！ 先鋒隊は壊滅、グラマトン侵攻ならず。魔物は支配権を奪われた模様」

バーンドベルグ城、その謁見の間に、伝令は興奮気味に報告した。

「しかし後続部隊が即座に盛り返しつづあります。我が方は変わらなず優勢、一両日中には先の進軍ラインまで到達できるということです」

聞いて臣下どもは、ほっと胸を撫で下ろしていた。彼らには一様に不安の色が見え隠れしていた。

「おのれグラマトンの司祭どもめ、早々に魔王を戦線に投入するとは」

「しかし閣下の仰る通りでしたな。よもや先鋒隊の壊滅まで予測されておられたとは」

「当然だ。ワシを誰だと思ってる」

鼻で嗤うと、玉座に座る皇帝ギウスターヴは肥えた腹を撫でた。

（やはり魔王復活は成ったか。まあよい。世に出て日の浅い過去の遺物など我が軍が蹴散らしてくれる。万一の場合は、ワシのこの力でもってな）

男はふと、手にした力と、ことの経緯に思いを馳せる。

イセリア王家に代々伝わった不可思議な力。その正体とは——かの英雄王、セリオスIIブリティッシュが有した破邪の力だった。その力は強力無比で、文献によれば魔王そのものを御するほどであると言われていた。

そしてその力は、イセリア王族の処女を奪った者に授けられる。また処女

を奪われた女は、相手の男に逆らえなくなるという特性を持つ。ゆえにイセリアは、継承者選びに大層、心を砕いてきたのだ。

しかし重要機密がゆえに、その詳細は伝え広まることなく、やがて廃れて人々の記憶から忘れ去られていった。処女を捧げた男にのみ尽くすという伝承は、今では王族の神聖性の謳い文句に成り果てたも同然だった。

（愚かなことだ。最強の魔物を従えるほどの力なのだ、使わず秘匿などするから強奪の憂き目にあう）

フィオナを犯して得た力。これがあれば、件の魔王すら手駒にできるはずなのだ。むしろ魔王復活は男にとっても望むものだった。

もつとも、イセリアの伝承を知った当時には力の入手方法こそ知れたものの、魔王復活の術については文献を漁っても判明しなかった。それゆえ魔王の手駒化については、半ば頓挫していたところだった。

そこへ降って湧いたのがグラマトンからの同盟話である。その裏には淫祇邪教があり、彼らの真意がメイズ復活と魔王降臨にあると知ると、渡りに船とばかりに利用させてもらったのだ。

（グラマトンの邪教徒どもは今頃さぞご満悦だろうな。愚か者どもめ。虎の子の魔王を奪われる様を見て、せいぜい怯え、疎むがよい）

その瞬間を夢想しギウスターヴはひとり、含み笑いを漏らす。すべては予

測の範囲内。用済みのグラマトンには速やかに舞台を降りてもらおう。最凶の魔物すら従えた自分は文字通り世界の頂点に君臨することとなるだろう。

己が策略に内心酔っていた、その時である。

「陛下、グラマトンより使者が参られております」

「？ ほう、通せ」

思わぬ来客に興味を持ち、ギウスターヴは謁見を許してやった。

衛兵らに囲まれ現れたのは、数名の使者と、そしてひとりの見目麗しい美女である。

その女を見て、男はほう、と口端を上げた。

大きく肩の開いた、聖女を思わせる純白のドレス。金糸のようなつややかな長髪と、頭に頂く見覚えのある王冠。目を見張るようなグラマラスボディに、優しい色香を放つ美貌。

見紛うはずもない。イセリア国女王にしてフィオナの母、アリオナIIブリティッシュである。

（よもやアリオナが来るとはな。捕らわれたと聞いたが、今頃になって何の真似だ？）

イセリアにとってはグラマトンも怨敵に違いない。両国が手を携えたとは到底思えなかった。

気分がよかったギウスターヴは、話くらいなら聞いてやろうと促してやる。すると使者は、跪いて言った。

「グラマトンから手を引いていただき

たい。代償として、この美しき女を献上いたしますよう」

「——く、はははははは！」

ギウスターヴは哄笑した。

「何を言ひ出すかと思えば。この女ひとつでワシが手を引くとも思ったか？ 本気で欲しくばどうに力でも奪っておろわ。フィオナのようにな」

娘の名が出た途端、どこか夢現だったアリオナの目が刹那だけ光を宿したかに見えた。

そのアゴをクイツと持ち上げ、男はさらに嘲笑う。

「フィオナの処女膜はワシがぶち抜いてやったぞ。素晴らしい具合だった。自慢のモノが歓喜に震えおったわ」

「ああ……フィオナが、お、オチンボに……」

男の股間に視線をやってアリオナは切なげな目をした。それを見て、ギウスターヴは理解する。

（ふふん、とうに墮とした女か）

数多の女を犯した彼にはアリオナの欲情の煙りがわかる。おそらく彼女は、様々な恥辱を受けてきたのだろう。

正直、面白くない。初心な生娘を自ら仕込むのがギウスターヴの好みなのだ。並の女であれば使い古しだと見向きもしなかったらう。

だがアリオナはそこいらの女とは違い、清らかそうな美貌の中にも脂の乗った牝の妖艶さを漂わせている。フィオナによく似た美しい面立ち、年齢を感じさせぬ瑞々しい肌艶、娘以上の豊

満な乳房に大人の女らしい見事な巨尻、それらすべてが若い娘にはない成熟した色香を放っていた。

この女を差し出すということは、つまり好きに犯せということだ。言わば据え膳、あえて伸ばさぬ食指はない。それでなくともアリオナを手元に置けば、イセリアの残党も二の足を踏むに違いない。

「面白い。この女はもらい受ける」

「では我々と停戦を——」

「勘違いするな。手を引くなどと言った覚えはないぞ」

言ってギユスターヴは指を鳴らした。意図をよく知る衛兵たちは一斉に使者を取り押さへ、

「ひつ!? ぎやあああつ!」

ドスッ! と鈍い音を立てて使者の首が絨毯に転がった。

血飛沫を上げる軀に一瞥すらくれず、ギユスターヴは玉座に座ったままズボンからペニスを出していた。

「さあ、アリオナ女王陛下。早速楽しませてもらうか。言っておくが、ワシのモノは凶暴だぞ?」

傲然と言う男の目には、独裁者としての狂気と欲望が渦巻いていた。

「はあ……お、オチン、ポお……」

虚ろな眼差しをアリオナは揺らしていた。

目の前の男、皇帝ギユスターヴは自尊心たつぷりに玉座に構え、他者の目にも気にせずズボンの前を開いている。

その硬化していない男根は、けれど実に太くて長く、黒々としていて禍々しい。アレに娘が犯してもらえたと想像すると、肉ヒダと子宮がきゅーんと切なくなってくるのがわかる。

（ああフィオナ、なんて——羨ましい。アレにガンガンに突かれて、よがらされて、男を知らない初心な子宮に精液どくどく注いでもらえたなんて……）

休む間もなく犯され続けたアリオナの肉体には、底の見えない牝の肉欲が骨の髄にまでこびりついてしまっていた。そう、男にも魔物にも、肉棒を生やした同性にも、果ては己が生んだ魔王にすらも絶え間なく擦られ続けた淫肉は、たちまち官能の媚電を生み出す超敏感な快楽器官へと変貌していた。

もはや何人に犯され——否、犯してもらえたかわからない。長らく募ってきた身体の疼きが、何度満たされたか覚えていない。今でさえ、忌むべき敵を前にして、その肉棒の感触を妄想し下腹が期待に熱を帯びていく。

だが、ここまでの道のり、ほんの少しの休憩を挟んだことによつて、アリオナの中には欠片程度の思考能力が舞い戻っていた。

（だめ……今、犯してもらえたら、また戻れなくなる。せっかく魔王様に犯してもらえていたのに——はっ? いえ違うわ、魔王様のもとから離れたというのに）

しかしそれでも、まともには思考が働かないほど彼女の意識は快楽に捕ら

われてしまっていた。周囲には人もおり好色な視線が恥ずかしい。愛しい娘を汚した相手に毅然とせねばと思いつく。が、男の肉棒から目が離せず、ただただセックスの悦びを思い出し自然と淫汁を染み出していく。

（はあん、だめ、見ているだけで頭くらくらしきやう……欲しい。オチンポが欲しいっ）

跪き逡巡しつつも、アリオナはああ……と吐息を漏らす。心は瀬戸際で抗ついても、熟れた肉体はほのかに汗ばみうつすらと桃色に染まりつつあった。

「どうした早くせぬか。でなければすぐにでもグラマトンに攻め入るぞ?」

「っ!? だ、だめっ! それは、それだけは……!」

（魔王様のオチンポを味わえなくなる! 愛しい魔王様の、私が産んだ愛しい我が子のっ!）

ギユスターヴの言葉が強い焦燥を生み出した。それほどに、彼女の中では魔王の存在は大きかった。

矢も盾もたまらずアリオナは這いより、男の肉棒に舌を這わせる。

「んんっ、じゅる、れろれろっ……はあ、も、申しわけありません。すぐに、すぐに気持ちよくしますから……」

男の両足の間に入り込み縛るようにして肉棒を舐める。長く伸ばした舌を動かしせつせとサオに唾液を塗す。尻まで振つて奉仕する様は、まるで忠実な犬のようだ。

そんな自分に刹那だけ惨めさを覚えるも、アリオナはすぐに男根の味に酔い痴れていった。

「くちゅ、づるるっ、ああ苦い……臭い……オチンポ、美味しい……!」

野生の獣の体液のような鼻腔に突き刺さる男のにおい。美味なはずもないそれが、しかし彼女には極上の珍味に思えてならず、たちまちトロロンと目尻を下げて小鼻をヒクつかせてしまう。

「はあ嬉しい。硬くなってきました……血管浮き出てきて……ああ、傘が張ってきいてやらしい……」

まだまだ余裕の表情だったが男は少しずつ感じてきている。ペニスは段々と上を向き始め、数多の女を犯し抜いてきた猛々しさを見せてくる。

（ああ、なんて雄々しいのっ! 魔王様には劣るけれどトルロなどにも負けていない。こんなのにおまんこずぼさされたら、私すぐに感じちゃう!）

人間のそれとは思えないほどの剛直に、アリオナの意識は甘やかに焙られていく。下腹がヒクつき、中から淫汁が漏れ出してきたのがわかる。

それは牝としての生殖本能から来る反応。生物としての根幹部分が、強い牡とのセックスによる子宮での遺伝子配合を望んでいるのだ。

だがギユスターヴはちつとも満足していないようだった。

「そんなものか? ふん、その程度では出るものも出ぬわ」

やはり男は淫戯に慣れている。そこ



「人妻の割には拙いフェエラだ。これでは飽きてしまう。早々に切り上げてグラマトン侵攻でも——」

「はああ——待って、待ってください！ わ、わかりました、私の本気を見せて差し上げます……！」

玉座を立とうとするギユスターヴをアリオナは制した。愛しい魔王のため全力で男に奉仕しようと決める。

（そうよアリオナ、思うままオチンポを貪ればいいの）

自らに免罪符を与え、アリオナは大きく口を開き、太いカリをばつくりと頬張って——。

「んぐっ……ぐっ、ぐぐぐむむっ！」

——ずるるっ、ごきゆるるっ！

「むおっ、おお……これはいい、喉にまで押し込むとは」

少し身体を浮かせたアリオナは、斜め上から覗き込むようにしてカリを咽頭にまで飲み込んでいた。

そのまま窮屈な喉で締めつけ、全身を前後に揺すりながら柔らかい唇で根元もしごく。

「んぐっんぐっんぐっ、ごんんっ！」

（くっ、苦しいっ！ 息ができない！

あ、頭、ぼーっとしてきて……はああでも、オチンポの味、奥に来るう……お、美味しい……！）

ただでさえ太い男の力は、細い首の狭い喉などばんばんに圧迫してしまふ。首の骨すら押し広げるような強烈な感覚が美女を襲う。

自主的行為ではあるが、まるで肺や気管支までも犯されていくかのよう喉仏辺りにごりりと引っかかり眩暈と嘔吐感すらこみ上げる。

しかしそれでも、濃くなっていく牡臭さ、脈動していく血管の蠢き、心地よさげに開くエラが濡れた粘膜を挟る感触、そのすべてが、朦朧とする意識にふしだらな感情を与えていく。

（あびくっしてしてる、寧ろもきゅっしてきて、射精したそうにしてる。ああん、おツユが喉にぬるぬる当たって、かつ、感じちゃうのおっ！）

被虐の悦びも知るアリオナは、窒息しそうな感覚の向こう、未知なる粘膜を擦るはる刺激と胃袋にまで響く衝撃にさえ、腸が震えてくるような異様な恍惚を見出してしまっていた。

この硬く逞しい肉の棒がヴァギナにも叩き込まれると思うと、それだけで肉ヒタの疼きが止まらず大陰唇がネロリと開いていくのがわかる。

（まだ半起ちなのになんかにきつ……あああ、何て遅いの。こんなオチンポがギンギンに勃起したら私、が、我慢できなくなっちゃうっ！）

高まる期待感と生殖本能が、美女の喉をきゅんとわななかせペニスをすりぬずりゆとしごき立てていく。肉欲が唾液をこんこんと湧き立たせ、粘膜のぬめりをより強くして肉棒奉仕をスムーズにしていく。

「んぐっんぐっぐつちゅぐつちゅっ！ふーっふーっ！」

「おお……悪くない。狭い喉がぐいぐい締めつけおるわ」

これにはギユスターヴも確かな快楽を得ているようだ。いまだ余裕顔だがペニスははつきりと勃起しつつある。

「唇と喉で同時にしごくとは、さすが人妻。だがまだだ、このワシを籠絡したくばもつと大胆に誘ってみせんか」

彼は笑い、つま先でアリオナの陰部を擦った。ドレスのスカートの陰部に触れて破廉恥なシミが浮き出てくる。

「んぐっ……はああだめ、足なんかじやなく、お、オチンポ、をお……」

「ふふん、もう濡らしおつて。それ、淫売らしく誘ってみせよ」

「は……はい……」

大口を開いただらしない面持ちでアリオナは従順に頷いた。頭の片隅にはかすかに嫌悪感が残っている。が、しかし、長さや径をいや増す肉棒、そのえぐい外見と禍々しい亀頭の魅力には抗うことなどできなかった。

（欲しい……もつと、もつともつといやらしくして、えぐいオチンポ生ハメして欲しい！）

これに貫かれかき回される度、喜びで何もかも忘れられる。魔王様と生ペニスだけが私を満ちさせてくれる。牝の本能にそう刻み込まれた女王は、憎き怨敵に犯してもらおうべくその身体に

よじ登った。

「おお、あのアリオナ女王が何と浅ましい格好を……！」

オナは何と、玉座に座る男に無理やりシックスナインの体勢を取ったのだ。男の肩に膝を置き、スカートを捲つて中身を露出。逆立ちに近いその頭部は真上からずるりと男根を頬張る。尻を大きく掲げ上げた、異様な体位が出来上がっていた。

しかも露わになったショーツは、これまた破廉恥極まりない。

「ほお、穴が開いておるではないか。スケベなマン肉が丸見えじゃわ」

「はい、犯していただきたく……」

白い蝶の造詣を持つ、陰部が開いたエロい下着。そこから覗く肉厚の大陰唇は、すでにばつくりと開ききつて涎のような淫汁を滴らせていた。

飢えた獣の口のように肉ビラを溢れさせヒクつく淫孔。そこに自ら指を突き込み、ねつちよりと混ぜてアリオナは尻を振る。

「ふおお……お、お願いです、どうかこのいやらしい女王牝に、お、お情けをお……」

「くははは、何という浅ましきさだ！ 見る者ども、これが誇り高きイセリア女王の成れの果て。一皮剥けば所詮はチンポ狂いの淫牝なのだ！」

大仰に嘲笑うギユスターヴ。魔王に怯える臣下たちに優位を示す意味もあるのだが、アリオナがそれを知る由はないし、また知りたいとも思わない。ただ皆から浴びせられる好色と嘲弄の視線、そのグサグサと突き刺さる恥辱感覚に歪んだ恍惚を覚えるばかりだ。





この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**